
memories in the Glace

日番谷冬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

memories in the Glace

【Nコード】

N8499N

【作者名】

日番谷冬

【あらすじ】

90年前に行方不明となった、日番谷冬獅郎の幼なじみである少女、如月氷華。ようやく見つけた彼女には、これまでの記憶は何一つ残っていないかった。そんな二人をつけ狙う、二人の子供。これは誤解から始まった悲劇の物語。日番谷と如月の、悲しすぎる過去とは…… BLEACH初連載。モバゲー連載用だったので話の区切り多め。一章につき約20話で、本編は全四章完結予定です。

* * Prologue * *

あの日、俺がお前の傍にいれば。

お前を護ることが出来たのだろうか。

俺にもっと力があれば。

こんな事にはならなかったのだろうか。

死んだと思っていた。

あいつはもういないのだと、そう思っていた。

だが……あいつは生きていた。

90年の時を経て、俺の元に戻って来た。

「貴方は……誰？」

記憶の無い、ただの少女として
。

誤解が生んだ憎しみ。

伝える事の出来なかった真実。

悲しみは時間と共に膨れ上がり、新たな悲劇へと繋がっていく。

惨劇の舞台が今、始まるうとしていた……。

ギョウゴトト？

ギョウゴトト？

やっと見つけたのに。

『……こんな所にいたんだな』

やっと会えたと思ったのに。

ずっと、待ってたのに……

『俺の名前は……』

聞こえない。
聞こえないの。

なにも……

なにも聞こえない。

『暴れるんじゃない！』

『嫌だ、やめてっ！』

失いたくない。
消したくないのに。

『いや、だ………助けて………』

『

どうして？　なんで？

なんで思い出せないの？

なんですぐに消えてしまうの？

なんで……なんで………？

『……ッ

！……』

大好きだよ。

誰よりも、ずっとずっと

貴方が大好きだった。

ずっと一緒にいたかった。

世界でたった一人の、私の……

……私の……なに？

誰の事を言ってるの？

私は今、何をしてたの？

なんで、こんな所にいるの？

私は……

誰なの……？

わからない、わからないよ……

助けて……。

S t o r y O · P r o l o g u e

「今日も、ゼロ……か」

薬品の臭いが染み付いた真っ白な室内。

花すら置かれていない、子供の病室にしては殺風景なそこに、同じく真っ白な衣服に身を包んだ一人の少女がいた。

その手にあるのは、一冊のノート。

「お見舞い人数ゼロ……と。

なんか書くの疲れてきちゃうなあ………」

紙の上に並ぶ“0”の文字。

その数字が増える気配は、一向に無い。

「……仕方がない……か。

いいや、どうせ明日には退院だし」

小さく息を吐くと、視線を窓へと移す。

一点を見つめる青い瞳。

その視線の先にあるのは、空や庭でも、ましてや人間でもなく。

「また来てた。化け物と戦う黒服の少年。
数日ぶりみたいだし、今日の記事はこれで決まり、だね」

そう、彼女には見えているのだ。

普通の人には見える筈のないもの。

黒服の集団と大きな化け物。

死神と虚の姿が……。

t
o
b
e
C
o
n
t
i
n
u
e
d
. . .

* * キャラクター設定 * *

この連載に登場するオリジナルキャラの紹介です。

設定自体は、本編が完結するまでは“仮”とさせていただきます。
後々変更があるかもですが、ご了承下さい。

斬魄刀の技の内容説明は、本編の進行に伴い徐々に更新していく
予定です。

* * ヒロイン * *

如月氷奈きなの けい

死神名、如月氷華きんぎょの けい

16歳（仮年齢）

12月20日生まれ / 130cm / 23kg

髪：微かに青色がかった銀色をしており、腰より少し短い位のス

トリート

瞳：サファイアのような透き通った青

日番谷冬獅郎の幼馴染みであるが、本人は記憶が無い。

それも只の記憶喪失ではなく……。

また、実は二人は尸魂界で出会う以前から何らかの接点があった。
(此方の話は後に番外編として詳しく書く予定なので、この連載では少し触れる程度になる予定。)

CVイメージ：田村ゆかり

* * 斬魄刀（物語の後半で登場） * *

ゲッセンカ
月閃華

【実体化】

氷の蝶。

人間時は腰まである銀髪に金色の瞳を持ち、白い膝丈位のワンピースを着た少女になる。

146cm

CVイメージ：南條愛乃

【解放・始解】

解号は「奏でよ、月閃華」

柄に氷の花が付いた刀。

冬獅郎と同様柄から出る鎖鎌は翼のような形をしている。

また、「奏でよ」ではなく「裁きを与えよ」と唱えた場合、氷のように透き通った鎌に変化する。

刃の付け根部分に氷の華がついてる。

【解放・卍解】

解号は「卍解、青蓮月閃華（シヨウレン）」
蒼白い光を放つ氷で出来た蝶の羽を背中から生やし、そのすぐ下（腰の後ろ位の位置）から氷の長いリボンを靡かせる。
瞳の色が金色に変わる。

斬魄刀は刀ではなく、蝶の模様の彫られたフルートのような形になる。

ちなみに氷華は卍解の名にちなんで、具象化状態の月閃華を「青蓮」と呼んでいる。

（理由はそちらの方が言いやすいから）

【技の種類（仮）】

十：始解

卍：卍解

十第1楽章、
月鏡つきかがみ

十第2楽章、
氷輪雪月華ひよつりんせつげつか

十第3楽章、
白月の舞はくげつのみ

十第4楽章、氷幻鎖縛ひょうげんさばく

十第5楽章、氷月輝閃ひょうげつきせん

十第6楽章、瞬鳳しゅんほう

十第7楽章、鈴風の舞すずかぜのまい

十第8楽章、華葬紅氷雨かそうへにひさめ

十第9楽章、氷羽大紅蓮ひょううだいくれん

十第10楽章、万矢・紅染の鳥籠ばんし・くせんのとりにかご

* * 味方側オリジナルキャラ * *

藤堂風音とうどうふうおね

外見年齢、21歳

6月23日生まれ / 168cm / 53kg

髪：茶色の髪を一つに結び、毛先を緩くカールさせている。長さは肩より少し長い位

瞳：漆黒の瞳。どちらかといえば二重

110年前、浦原と共に追放された死神。

浦原の命令で空座一高校に3年生として通い、いつも少し離れた

所から如月を虚等からさり気無く守っている。

尸魂界での接点は全く無かったものの、現隊長格（特に京楽+日番谷）と如月の事に詳しい。

CVイメージ：石毛佐和

【斬魄刀】

ライエンマル
雷炎丸

【解放・始解】

解号は「全てを無に還せ、雷炎丸」

斬魄刀は二つに分かれる。

雷と炎を纏った刀。

振るうとそれぞれ雷や炎の鳥となり、相手に物凄い勢いで突っ込む。

【解放・卍解】

解号は「卍解、鳳凰雷炎丸」

背中に鳳凰の翼が生える。

瞳が赤くなる。

二対の刀が混ざり合い、形状を変えて一本の長い鞭になる。

【技の種類（仮）】

十：始解

十：解

十第壹幕・鳳凰炎舞
だいちまく・ほうおうえんぶ

十第貳幕・陽炎
だいにまく・かげろふ

十第参幕・裁神緋雷
だいさんまく・さいじんひらい

十第肆幕・对刃架
だいにまく・ついじんか

十第伍幕・鳳凰雷炎舞
だいまく・ほうおうらいえんぶ

十第陸幕・昂龍
だいろくまく・こうりゅう

やじまゆた
矢島聡太

16歳

5月2日生まれ / 166cm / 55kg

髪：黒でちょっと跳ねてる。長さ的には檜佐木より少し長い位
瞳：黒。外見はどちらかというと可愛いよりもかっこいい寄り

一護達のクラスメイト。

小さい人や物が好き。

如月氷華に一目惚れ（？）するが、中々声をかけられずにいた。
かなりの馬鹿。テンション高い。

けれど仲間思いで、一度友達と認識した人の為ならなんでもする。
今度も如月や日番谷の為に、人間なりに頑張ろうとしているのだ
が…。

CVイメージ：阪口大助

* * 敵側オリジナルキャラ * *

雫音しずね

7月9日生まれ / 154cm / 41kg

髪：茶色。赤のリボンで二つに纏めている

長さは結んだ状態で腰位。少し癖っ毛

瞳：焦げ茶

まだ少し幼い少女。

西流魂街第80地区出身。

日番谷と如月の事を酷く恨んでいるようだが……？
人の記憶を消し、負の感情を増幅させる能力を持つ。
CVイメージ：中原麻衣

勇将はやと

7月9日生まれ / 162cm / 53kg

髪：黒で、後ろだけが長く一つに纏めている（ウルフカット）
長さは腰より約10cm上位
瞳：限りなく黒に近い紺色

西流魂街第80地区出身。

稟音とは家族のように育った。

こちらも日番谷と如月を恨んでいる。

人を洗脳し操る能力を持つ。

CVイメージ：山内悠椰

* *メインキャラ* *

【日番谷冬獅郎】

十番隊隊長。

如月氷華の幼馴染みで、氷華に名前を与えた人物。

如月と共に、今回の事件の鍵となる少年。

如月と女子供、浮竹（病人）には甘い。

更に面倒見の良い性格のため、困っている人は放っておけない。

自分の事は二の次で他人を優先する。

動物と冷たいもの、子供向けアニメが好き。

暑さに弱く、すぐに無理するせいか過労にもなりやすい。

如月と共に、敵と何らかの関わりがあるようだが……？

時々短気。

注射や薬を極端に嫌うが、その奥には本人も忘れてしまったある理由が……（こちらは番外編にて）

【黒崎一護】

大切な仲間は意地でも護る。
芯が強く真つ直ぐな高校一年生、またの名を死神代行。
冬獅郎の事を弟のように見ている。
ちよつと短気。
冬獅郎同様背負い込み易い節がある。
今回の事件で二人を護る為奮闘する。

【朽木ルキア】

黒崎一護を死神にした人物。
黒崎と共に二人を敵から護ろうとする。
元々如月と同じ隊だった為、二人の事に関しては他の人間より少しは詳しい。
日番谷と如月に憧れている。

【松本乱菊】

十番隊副隊長。
朽木同様、日番谷の関係者であるため二人の事に詳しい。
常に二人を近くで支えようとする。
書類仕事や現世での行動はともかく、戦闘に関しての信頼は高い。
辛い事程話そうとしない日番谷に胸を痛めている。

【浦原喜助、四楓院夜一】

黒崎達を現世で陰ながらサポートしてくれる人物。
独自の視点から事件の真相を暴こうとする。

【浮竹十四郎、京楽春水】

尸魂界側からサポートしてくれる主な人達。
浦原達同様独自の視点から事件の真相を調べ、黒崎達に解決のヒントを与えてくれる。

その他キャラ多数出演予定……です。

「イーツチぐっほあっ!！」

「あっ、おはよう黒崎くん!！」

「おはよう、一護」

「よう」

「おはよう井上」

「朽木さんもおはよう!！」

朝。

後ろで黒崎達の声が聞こえる。

俺は席から動かない。

いつものこと。

「相変わらず早いな、冬獅郎」

「日番谷」だ。

名前で呼ぶなと何度言えば分かるんだ？ 黒崎一護

このやり取りももう何度繰り返したのか、今ではこれが俺達の挨拶代わり。

子供扱いは嫌いだ。

が、コイツの場合慣れればそんなに嫌じゃない。
浮竹同様、悪気があるわけではないし。

諦めたという部分が強いが、楽しいという気持ちが欠片も無いかと問われれば、恐らく「いいえ」なのだろう。

というか今更改められても逆に気持ち悪い気がする。

「今日は何事も無いといいけどな。昨日の戦いで、井上も疲れてるみたいだし」

「……………そうだな」

そのまま視線を空へと向ける。

今日は快晴、洗濯日和。

いつまで続くか分からない平和。

明日には終わってしまうかもしれない。

俺もここに居ないかもしれない。

黒崎も、朽木も、皆。

護り抜くつもりはある。

しかし未来は、わからない。

退屈な授業を受けて、虚が出れば抜け出して。

生死を賭けた戦いと、いつも通りの日常と。

俺達はただ、それを繰り返すだけ。

変わる事など、もう無いのだと思っていた。

……その筈だった。

O
T
u
r
n
S
t
o
r
y
1
·
c
o
g
W
h
e
e
l
t
h
a
t
b
e
g
i
n
s
t

「おはようございます日番谷隊長。今日も暑いっすね」

チャイムが鳴ってから数秒

外へと視線を向けていた日番谷にそう話しかけてきた人物がいた。

阿散井恋次。

日番谷達同様、現世に派遣された先遣隊の一員である。

座席は廊下側から三列目の前から五番目　　朽木ルキアの隣の隣
だ。

対して日番谷は一番窓際の前から二番目。

今日はまだ涼しい方だが、暑い時期は日射しが直に当たる嫌な位置。
置。

阿散井の席からも、少しばかり距離が離れている。

そのまま後ろに視線を移すと、男子が数人固まっているのが見えた。
た。

恐らくそこから抜けて来たのだろう。

厳つい容姿に似合わず親しみやすい性格からか、こちらはいつの間にかクラスに溶け込んでいるようだ。

一方日番谷はといえば、相変わらず単独行動が目立つ。

現世でも変わらず発揮されるズバ抜けた才能に、外見の幼さと内向的な性格も重なって、誰も話しかける事が出来ないでいるのだ。

人気の高さは全校でもトップ3に入る程。
しかし本人だけがそのことを知らない。

そのため一日一日を淡々と無駄なく過ごしているだけ。
自ら輪に入ることとも無いので、面倒は避けられる代わりに情報や噂が直接正確に伝わって来ることも少ない。

しかし大事な情報は阿散井や朽木が報告してくるし、隣のクラスには松本や斑目、綾瀬川も居る。
単独行動だからこそ得られる情報というのも、少なからずある。

それで充分。

元々人間にはあまり干渉してはいけない身。

友達など、作ろうとは思わなかった。

「阿散井……もう予鈴鳴ったぞ。
それと隊長はやめとけ。現世の学校では呼び捨てでいいといつも
言ってる筈だ」

「あ、すみません。つい癖で……」

小さく溜め息を吐けば、もう一度謝罪を述べる阿散井。

端から見たらかなり滑稽な図なのだろう。
自分で考えて二度目の溜め息が溢れた。

「……まあいい。で、何の用だ？」

「ああ、そうだ。今日新しい生徒が来るって噂……隊長聞きました？」

「何度か耳にはしているが……それがなんだ、興味でもあんのか？」

「イヤそういうワケじゃないんすけど、さっきそこで丁度話してる
の聞いたんで」

「そうか」

授業で使う教科書を開きながら、適当に返事を返す。

授業中は基本的に尸魂界から持ち込んだ書類をさばいているので、いつ当てられてもいいよう予習も兼ねて、今回の内容を事前に把握するためだ。

これが毎日の日課。

誰が増えようと興味は無かったのだが。

「ただ、ちょっと引っ掛かるっていうか」

続けられた言葉に手を止め、阿散井を見上げる。

「引っ掛かる？ ……何がだ？」

「その生徒の外見的特徴がっスよ。」

職員室前で見たって奴に聞いたんスけど、どうも聞き覚えがあるっつーか……」

「知り合い、というんことか？」

まさか。

死神という事はまず無いだろう。
今のところ、助っ人が必要な程の手傷は負っていない。

となると現世の人間か？

しかし二人に共通する現世の知り合いといえば、黒崎家と浦原達
しかない筈……。

考えるところは阿散井も同じだったらしく、数秒考えるような素
振りを見せた後すぐに首を振った。

「イヤ、やっぱり俺の勘違いだと思います。すみません、隊長忙しい
のに余計な時間取らせちゃって」

「いや………気にするな」

言うだけ言って席へと戻っていく阿散井。
そこで扉が開き、担任が入って来た。

「皆席につけ、出席を取るぞー！」

点呼の声を軽く聞き流しながら、頬杖を突き阿散井の様子を伺い見る。

その顔は、もういつも通りの彼だった。

「なんだ珍しいな、全員出席か。」

丁度良かった。もう知ってる奴も居るとは思うが、今日からのクラスに新しい生徒が増えることになったから紹介する」

視線を担任へと戻す。

ざわめき始める室内。

死神も人間も、人であれ物であれ新しいものには興味を示す。

日番谷達の時もそうだった。

どれだけ地味に動いても存在感が有り過ぎるためいい話題のネタにされ、数日前にようやく落ち着いたばかり。

流石にそこまで長期はないにしても、転校生というだけで無駄に盛り上げられるような奴等。

また数日の間は騒がしくなりそうだ。

「なあ、まさかまた派遣されて来たなんて事はねえよな……」

「有り得んな、護廷も暇ではないのだ。事件の後始末が残っておるからな」

「だよなあ……」

黒崎や朽木の声も聞こえてくる。

黒崎の席は日番谷の二つ後ろ。
朽木がその左斜め後ろ。

当人達は小声で話しているつもりらしいが、微かとはいえ日番谷の席まで聞こえて来るのだ。
間に挟まれている生徒には筒抜けだろう。

阿散井は阿散井で、隣の席の男と何やら話しているらしい。

言っておくが今は休み時間ではない。

しかも直接的でないとはいえ、尸魂界の話が現世の人間に易々と聞かせていい筈がない。

仕事の鬼とまで呼ばれる程に真面目な日番谷が、見逃す筈はなかった。

「うるせえぞためえら、静かにしやがれ！
今は騒いでいい時間じゃねえだろうが」

死神達には牽制の意味も込めながら、渋々振り返り注意する。

隊長格に逆らう馬鹿は死神にはいない。

黒崎達は勿論、クラス中の生徒が静まりかえった。

度々阿散井や黒崎に怒鳴っては空気を凍えさせていたせいか、それ以来クラスの奴等も日番谷の機嫌に敏感である。

それに満足した日番谷は、一通りクラスを見渡してから視線を前に戻した。

「日番谷、お前いつの間にかクラスのまとめ役だな。これからも騒がしくなったら日番谷に頼むか」

「やめて下さい」

「あつはは、冗談冗談！！　っと、こんな事してる場合じゃなかったな。」

如月、入っといで！」

バサッ……

担任の声が響いたと同時に教科書が掌をすり抜け、地面で乾いた音をたてた。

青緑の瞳が小さく揺れる。

「ん……どうした、日番谷？」

「いえ……なんでもありません。すみませんでした……」

呟くように言ってから教科書を拾う。

「日番谷隊長……」

「如月か……懐かしい名だ。」

やはり日番谷隊長といえど、忘れる事など出来ぬ……か……」

阿散井と朽木の弦きが聞こえた。

忘れられる筈なんてない。

例え中央指令室の命令だとしても。

瀟靈廷を守護する隊長として、仕方ないことなのだとしても。

切り捨てられる筈がない。

如月。

覚えのある名字。

それは日番谷にとって、最も大切な人物の名。

確かに、この世界には同姓の人間なんていくらでもいるのだろう。
しかし……

『その生徒の外見的特徴がっスよ。どうも聞き覚えがあるっつーか
……』

先程の阿散井の言葉。

（ まさか……そんな筈……

だってあいつは……！）

有り得ない。

ただの偶然に決まってる。

だって、あいつは……

(現世で、死んだって……)

四十六室からは、そう聞かされた。

現世で、彼女の霊圧が途絶えたと。

戦闘の形跡も見られたが、当の本人はいくら探しても見つからなかった。

代わりに発見されたのは、彼女の落としたハンカチ。

そして、折れた斬魄刀。

共に……血が、こびりついていた。

およそ100年も昔の話だ……

仮に生きていたとしても、高校生なんて有り得ない。

本人である、筈がない……。

そう自分に言い聞かせながら、再び席に着こうとした。

その時……

扉が、開いた。

ガタンッ!!

誰かが勢いよく立ち上がる音。

「あっ……貴女は……っ!」

(朽木……?)

明らかに普通とは違う声色に、視線を改めて扉へと向ける。

「っ……!」

心臓が、止まるかと思った……。

ほんの一瞬、全ての時間が停止したような錯覚を覚える。

見開いた瞳には戸惑いの色。

「……………まさか……………」

青銀の髪。

青の瞳。

身長こそ僅かに伸びているような気もするが、間違いない。

そこにいたのは彼等のよく知る人物

如月氷華、その人だった……

* * Story 2 · Deep born ditch * *

(……なんで……………)

ずっと、会いたかった。

(今まで、何処に……………)

どんなに絶望を突き付けられても。

(生きて……………いたのか……………？)

ずっと信じていたかった。

いや……心のどこかで信じていた。

（ 如月…… ）

きつと生きている筈だと。

無事でいてくれる筈だと。

（ 本当に…… ）

俺はまだ。

希望を持っていても、良いのだろうか……。

S t o r y 2 . D e e p b o r n d i t c h

静けさが包む教室。

時計の音が、嫌にはつきり聞こえる。

「どうした朽木、日番谷も……知り合いだったのか？」

「い……いえ……すみません……。」

人違い、でした……」

こちらに見向きもしない彼女。

青の瞳は映さない。

誰の姿も……………俺でさえも。

こんなに近くに居るといふのに。

「……………そうか。じゃあ、紹介するな。

今日からこのクラスに入る事となった、如月氷奈さんだ」

「……………ひ、な……………？」

担任の口から出たのは、違う名前。

黒板に記された文字も。

似ているけれど、違う。

(別人……………か……………？)

こんなに、似ているのに？

こんなに、懐かしいのに……？

「彼女は重い記憶障害を抱えていてな。

本当はお前達より1年先輩なんだが……学力の問題で、この学年から新たにやり直すことになった」

「留年ってことですか？」

「そういうこと。だがまあ気にせず仲良くしてやってくれ」

「記憶……障害……」

卯ノ花に聞いた事はある。

脳の異常により、記憶が混乱……もしくは無くなってしまった事。
原因も症状も様々で、治るといふ保証も無い。

思い出せないから、違う名前を名乗っているのか。
それとも本当に他人の空似か。

わからない。

あの心地よかった霊圧が……感じ取れない。

「今は席が空いてないな。

……仕方ない。悪いが、あの一番後ろの席に座っててくれ」

「……………」

無言のまま歩き出す彼女。

席へと向かう途中、擦れ違つ。

「……………」

視線は合った。

確かに合った筈なのに、表情一つ変わらない。
立ち止まらない。

まるで興味が無いかのようじ。

『やっぱりここにいた。ばあちゃんが呼んでたよ?』

『今日は稽古つけてくれるって約束だろ?』

『今度こそ負けないからな!』

脳裏に浮かぶのは、彼女の笑顔ばかり。

「……………違う」

たとえ本人であつたとしても。

これは俺のよく知る彼女じゃない。

「あの時みたいだ……………」

似ている。

初めて会った時の彼女の目に。

誰も信じる事が出来ない。

暗く冷たい、拒絶の目に。

「……………氷華……………」

また俺は……………

お前に何もしてやれないのか？

お前を、助けてやることは出来ないのか？

なあ……………

もし、お前によく似たあいつを救う事が出来たら。

護る事が出来たら。

それはお前の為にはならないだろうか？

お前の心には、届かないだろうか？

「すまない……………」

あの時から、後悔してばかりだ。

こんな顔が見たかったわけじゃない。

こんな再会は望んでいなかった。

俺はただ、お前をずっと

傍で護っていたかったんだ……。

こつなつたのも全て、俺の責任。

だからこそ……手遅れだなんて、思いたくはなかった。

「それじゃあ授業を始める！教科書の58ページを開いて……」

「

-
-
-
-

「日番谷隊長」

「朽木か……どうした？」

授業の終わった休み時間、朽木が俺の所に来た。

「あの方……氷華殿では……」

「……」

一番端の席で、頬杖を突き空を見つめる彼女。

先程までは人だかりがあったようだが、今は一人。

その姿が、過去の自分と被る。

「似てはいる。だが霊圧が無い。」

失っているのか、なんらかの結界の効果か……あるいは……」

「全くの別人か……ですか？」

「……ああ」

「しかし、あんな容姿の方が早々いるものでしょうか？
それに、この懐かしい感じは……」

朽木は十三番隊。

如月も……元十三番隊だった。

瀨霊廷の中では、恐らく朽木が一番近い場所にいただろう。

更に言えば俺達と同じ氷雪系。
年齢だって近い。

共通する部分があるからこそ、感じ取れるものもある。

朽木もそのことを言っていると、すぐに理解出来た。

「あいつ、寄ってきた生徒全員睨み付けて、追い払ってたみたいだ
ぜ？」

「黒崎、阿散井……」

「日番谷隊長が前に言った、如月氷華って……あいつの事っスよ

ね？」

「……そう、か。お前はまだ、会ったことが無かったな……」

ただでさえ交流の少なかった俺達だ。

阿散井は五番隊に属していた時期もあったらしいが、会うといえ
ば雛森くらいだったから、知らなくて当然か。

ただ、朽木隊長辺りにでも聞いたのだろうか……ずっと気にかけて
くれていた。

死んだという話はしていない。

それを知っているのは俺達隊長格と、俺の関係者である松本、雛
森。

そして、十三番隊だけ。

教える必要もないと思ったから、言わなかった。

「噂になってましたよ。」

ほら、お二人共そっくりですし……

日番谷隊長の女版が来たとか、第二の小学生がどうとか……」

「ちよ、恋次！ お前それ禁句……！！」

「あ……」

「……………」

黙ったまま席を立ち、歩き出す。

「たわけ！ 恋次、貴様日番谷隊長に失礼ではないかっ！！」

「わ……………悪イ……………」

「冬獅郎の奴、怒って……………あれ？」

「ん？」

向かう先は、出口でもましてや黒板の方でもない。

（わからねえなら、確かめればいい……………）

傷付くのを恐れていては、何も始まらない。

どうせ悩むくらいなら、自ら近付いて行けばいい。

『あいつ、例の天才児だろ？』

『俺等と1年しか違わねえんだってよ』

『餓鬼のクセに』

『生意気』

一人の寂しさは、よく知ってる。

差し伸べられた手の温かさも……知ってる。

このまま放っておけなかった。

「……おい」

「……？」

机を挟んで向かい合う。

動いた視線。

澄んだ青に、銀が映る。

「日番谷冬獅郎だ」

あの時と同じように、差し出した手。

すぐに取ってもらえるとは思わない。

ただ、もしも本物であるなら。

少しでも信じてほしかった。

思い出してほしかった。

「……………日番谷、くん……………ね。
……………よろしく……………」

(っ……………!)

少しの、逡巡。

そっと握り返された手は、やはり冷たくて。

それでも、瞳が少し柔らかくなった気がして。

『あいつ、寄ってきた生徒全員睨み付けて、追いついてたみたいだ
ぜっ。』

拒絶されなかったことが。

声を聞けたことが。

触れられたことが 嬉しくて。

『日番谷冬獅郎だ』

『……冬、獅郎？』

『ああ。お前の名は？』

『如月……わからない』

『そうか……。なら氷華はどうだ？
如月氷華、お前の新しい名だ』

『氷華……私の、名前……。
……うん、それがいい！
有り難う、冬獅郎 』

(こんなところは……変わらないな……)

間違いない。

この手は決して、別人なんかじゃない。

「日番谷くん？ ……どうかした？」

「……いや……なんでもねえよ」

その記憶に、俺がいなくても。

あのお前は、もう残っていないのだとしても。

重なる面影に、こんなにも喜びを感じてしまうなんて。

安堵を覚えてしまうなんて。

こんなにも……泣きたくなるほど、切なくなるなんて。

（重症、だな……）

俺はいつから、こんなに弱くなってしまったのだろうか。

考えて思わず、苦笑いが溢れた。

「冬獅郎のことは、受け入れるのかよ……」

教室中の視線が二人に向いていることなど、きつと気づきはしないだろう。

誰が行っても口を開きすらしなかった彼女が、手まで握っているのだから。

それに……

「あんな嬉しそうな顔、初めて見た……」

今自分が笑顔を浮かべているという自覚など、あの少年にはきつと無い。

眉間の皺も緩んだ、年相応の子供のような。

でも。

「嬉しい筈なのに……なんであんなに、辛そうなんだ……」

微かに潤んだ目。

時々噛み締める唇。

喜びと悲しみが同居した、といえはまだ分かりやすいかもしれない。

彼の複雑な心境が手に取るようにわかる。

「冬獅郎くん、なにか我慢してるみたい……」

「あの二人は、知り合いなのかい？」

「ム……」

「井上、石田……茶渡」

なんともいえない空気を感じ取ったのだろう、井上達も集まってきた。

その問いは全て、事情を知っているらしいルキアの方へ。

「ルキア……」

「……………」

言い辛い事なのだろうか、黙り込んだまま幼子二人に視線を向け

る。

仲良く会話している彼ら。
しかし何かが、足りない。

「……懐かしいな、この光景も。
あれからもう90年か……」

「90年？」

「お二人は……日番谷隊長と、氷華殿は……」

……幼なじみなのだ」

「えっ……」

90年という長い隔たり。

離れてしまった互いの存在。

あの頃の優しい思い出は

遠い過去にしかならないのだろうか……

* * Story 3 · Childhood friend * *

「きっと氷華殿にもわかるのだろうな。」

記憶には残らずとも、体は思い出に正直だ」

「じゃあ、やっぱりあいつは……」

「ああ、間違いない。」

如月氷奈と名乗っているが……あれは行方不明とされていた、如月氷華殿だ」

Story 3 · Childhood friend

彼女が日番谷を拒まなかった理由。

ルキアの口から語られた真実。

幼なじみ。

「あれ？ でも、冬獅郎の幼なじみって雛森って奴じゃ……………」

「もつと前だ。」

日番谷隊長と氷華殿は、尸魂界に来た時から一緒であったと聞いている。

「雛森と日番谷隊長が会ったのは、その何年も後の話らしいぜ？」

尸魂界に来た時から一緒。

俺達の世界で言うなら、それは“生まれた時から”ということ。

ただの幼なじみで終わらせるには、長過ぎる時間。

つまり……………」

「家族に、忘れられてしまったということか」

「冬獅郎くんかわいそう……………」

「だが、こうして無事に会えたのだ。
今はそれで充分だろう……………」

優しげな表情を浮かべるルキア。

しかし黒崎は気付いていた。

彼女の浮かべる安堵の色に、言い知れぬ不安が混じっている事に。

「……なあルキア」

「なんだ、一護」

「お前、まだ何か隠してねえか？」

ビクリと肩が震える。

それは、黒崎の言葉が事実だという証拠。

「やっぱりな。なにか気になる事があるんだろ？」

「それは……」

「頼む、教えてくれ。」

草冠って奴の時もそうだけど、あいつなんでもすぐ抱え込むからな。

またそうなっちまう前にさ、出来る限り力になってやりてえんだ」

「一護……」

「おい」

背後から聞こえた声に振り返る。

そこにいたのは、現在話の中心人物となっていた日番谷冬獅郎本人だった。

「何の話をしてる」

「いや……別に」

「次は移動だろ？」

「早く行かねえと授業始まるぞ」

そう言ってスタスタと歩いて行ってしまつ日番谷。その後ろをぴったりとついて歩く如月。

「お待ち下さい、日番谷殿！」

「あ、おいルキア……」

その後を追うように、走り出すルキア。

しかし、扉の手前で立ち止まると背を向けたまま口を開いた。

「……すまない、私も詳しくは言えぬ。

この話は、日番谷隊長の私情に関わる事かもしれないのでな。

だが、一つだけ……氷華殿が行方不明になった後、我々十三番隊と日番谷隊長の関係者にのみ、氷華殿は“死んだ”と……そう伝えられていた」

「死んつ……!?!」

薄暗い室内。

遠くなる足音。

「……恋次」

「……俺だって、正直あんま理解しちやいなえんだよ。

あの時十番隊で何かあったのは確かだ。

けどその当時、俺と隊長を含む上位席官はほとんど現世任務で留

守にしてたからな。

俺がわかるのは……事件後の尸魂界の様子だけだ」

「……そうか」

「黒崎、あまり足を突っ込み過ぎるなよ。

余計なお節介は、彼をますます傷付けるだけだからね」

「……それくらい、言われなくてもわかってる」

「……ならいいけどね」

二時間目開始のチャイムが、虚しく響いた。

- - - - -

「それでは、グループで始めて下さい！」

二時間目、物理の実験学習。

如月は日番谷から離れたがらないのと、今回が初めての授業という事もあり、そのまま黒崎達と同じグループとなった。

「まずはプリントに名前書かなきゃね」

「班長誰だ？」

「冬獅」「日番谷だ」……日番谷サンでいいんじゃないの？ 隊長だし」

「黒崎……テメエそついう時ばかり」

「あれ？」

「あ？」

二人の口喧嘩を遮った声。

日番谷が目線を隣に移すと、そこには一冊のノートと自分を見比べる如月の姿。

「……なんだ？」

「君……もしかして病院の外で戦ってた黒服の子？」

「」「」「……は？」「」

「ほら、これ」

そうやって彼女が差し出してきたのは、先程から自分と見比べていた黒いノート。

「日記……つけてたのか？」

「大事な事、忘れないようにって……言われてたから」

「……………そうか」

パラパラとページを捲る。

黒崎達も、後ろから覗き込んで見ているようだ。

そしてそのページにイラストとして度々見られる、同じ化け物と少年の姿。

「コレ、虚と冬獅郎だよな？」

「しかも死覇装の時だよこれ」

「この奥にいるのは一護か？」

「朽木さんと乱菊さんもいるよ！」

こんなに、近くにいたのか。

ずっと、俺達の戦いを……。

「あんまり小さいから小学生かと思ってた。高校生だったんだね」

「きつ、如月さん！ それ禁句っ！！！」

全員の視線が日番谷に移る。

しかし俯いたままの表情は見えない。

（怒ってる……。絶対怒ってる……！！）

身長の話は日番谷には禁句。
それで危うくアイスボックス行きとなりかけた者達をよく知っている。

だが、数秒経ってようやく顔を上げた彼の反応は、この場の誰も予想もしていなかったもので。

「うるせえ、お前に言われたくねえよ」

「ああ、確かに……私の方が小さいか」

（あ……あれ？）

眉間に皺を寄せ、腕を組み。

一見不機嫌にも見える態度だが、その声に棘は感じられない。

「怒って、ない……？」

「みてえ、だな……」

「日番谷隊長は、氷華殿には甘いからな」

「へえ……」

(なんだか今日は、冬獅郎の新しい発見ばかりな気がする……)

幼馴染みの存在とは、そんなにも大きいものなのか。

(……それにしても)

「こうしてるとやっぱりガキみたいで和m」

「あ”あ?”」

「ゴメンナサイ!!」

「バーカ、日番谷隊長の前でガキなんて言っんじゃ」

「阿散井」

「……スンマセン」

「聞いてたのか」

「意外と、地獄耳だ」

「こらそこ、サボってないで授業やれ！」

「はいイッ!!」

理科教師の一喝で、バラバラと実験を始めるメンバー達。

そんな中、一人実験に参加せず日記に目を通し続けていた日番谷。

しかし、最後のページの連絡先欄に視線を止めた。

(これ……………浦原喜助の……………?)

“浦原商店”。

そこに書かれた番号は、確かにその場所のものだった。

(……………帰りに寄ってみるか)

ここに連絡先が載っているという事は、彼女と面識があるという
こと。

何か、知っているかもしれない。

自分の知らない90年。

記憶障害の原因。

(なんでもいい、手掛かりだけでも……ッ！)

不意に、窓の外に気配を感じ振り返る。

だが、そこには鳥が飛んでいるだけ。

誰もいない。

(気のせい、か……?)

「冬獅郎！ お前もこつち手伝えよ！」

「日番谷だ！ 何度も言わせんじゃねエ黒崎！！ ……如月、行く」

「さっ」

黒崎に呼ばれ、日記を閉じる。
そのまま窓に背を向け歩き出した。

その背中を見つめる二つの影。

「やっと見付けた……」。

日番谷冬獅郎、如月氷華」

「これでようやく、俺達の復讐が果たせるんだね」

「まだ時は満ちていない。もう少し様子を見るの」

「全ての条件が揃った時……」

「最高の舞台を見せてあげる」

彼らはまだ気づいていない。

闇はもうすぐそこまで、近付いていると……。

* * Story 4 · Photograph of memories *

「ダアリイ〜〜ンツVV」

「松も……うぐっ」

そのまま時間は過ぎ、四時間目終了後。

昼食のため屋上に移動しようとした日番谷を襲ったのは

なんとも豊満過ぎる柔らかな凶器であった。

Story 4 · Photograph of memories

「乱菊さん！」

「やつほー織姫、今朝ぶりねVV」

「ま……つも、と……はな……」

「たいちよー！ 今日に限って教室移動で中休み来れないなんて…
…あたしこの4時間寂しくて寂しくて、もうホント隊長不足で死ん
じょうかと思いました！」

という訳で、充電させて下さいっv v

(その前に俺が死ぬっ！)

息苦しさにジタバタと暴れるも意味を成さず、今度はその背中を
ベシベシと叩いてみるものの、更に力を込めて抱き締められただけ
だった。

こんな時にこの体格差は不便だと思う。
破面の前に己の副官に殺されてしまう。

「あの、乱菊さん」

「なによ一護、あたしと隊長の熱い時間を邪魔する気？」

「イヤ、それいつも言うけどよ。
そろそろ冬獅郎死ぬって」

「え？ ……あら」

黒崎の一言で緩んだ腕。

その隙を狙って思い切り振り払い逃れれば、酸欠のせいかフラフラした。

「松本…… テメエ…… 俺を、殺す気…… か…… つ！！ ゲホツ、ゲホツ……」

「嫌だわダアリンったら、そんなことある筈無いじゃないですか。愛情表現ですよ、愛情表現」

「いらねえよ、んな愛情表現…… つかダアリンはやめろっつってんだろ。」

……斑目と綾瀬川は？」

「先に屋上に行ってもらってます」

「……そうか」

視線を後ろに向けると、戸惑ったように自分と松本を見比べる如月の姿。

松本も気づいたのか俺から視線を動かし、如月の姿を視界に入れた瞬間表情を固くした。

「隊長、この子……」

「……………如月氷奈。新入生だ。
とりあえず屋上行くぞ。詳しい話はそれからだ」

「……………はい」

- - - - -

「遅いつスよ日番谷隊長！」

「ああ、悪いな」

屋上に着き、全員でお弁当を広げる。

その後日番谷が軽くアイコンタクトを送れば、それだけで理解した松本は日番谷の向かいに腰掛け、その隣に座る如月ににこりと微笑んだ。

「初めまして。」

冬獅郎君のお友達の、松本乱菊です」

「お友達？」

「ええ。よろしくね、氷奈ちゃん」

眉間に小さく皺を寄せる如月。

そんな様子は、日番谷とそっくりだ。

差し出された手を見て、彼女は確認するように日番谷を見る。

その意図に気付いた日番谷が軽く頷いてやれば、おずおずと手を握り返した。

「……………よろ、しく……………。松本さん？」

「乱菊でいいわよ」

「……………乱菊……………さん……………」

「んもう、氷奈ちゃん可愛いつVV」

「ふわあっ!?!」

「やめろ松本っ!?!」

……………油断大敵とはこの事か。

ちょっと気を緩めた隙に、松本はそのまま如月に抱き付いた。

慌てて日番谷が二人を引き離すが、やられた本人は驚きのあまり目をぱちくりさせている。

「テメエ如月まで殺す気か!？」

「だからそんな気ありませんって!」。

氷奈ちゃんがあんまり素直で可愛いからつい……隊長もやってみたらどうです? 『乱菊お姉さんVV』って

「誰がやるか!」

「えー、やろうよ冬獅郎くん! 絶対可愛いよー!」

「ウルセエ、可愛い言つな」

「あつ、隊長赤くなってる! カワイーVV
写真撮っちゃえ」

「あつ、じゃああたしも」

「……テメエら……」

勝手に話を進め勝手に盛り上がる女達。
何故か写真撮影会まで始まっている。

日番谷がカメラを奪おうとするものの、身長差が災いして届かない。

そのまま如月も巻き込まれ、屋上の一角ではちょっとしたドタバタ騒ぎが巻き起こっていた。

「松本、井上……いい加減に」

「ストップ。駄目ですよたいちよ、ここで靈圧上げたりしたら。皆に正体バレちゃいますよ?」

「ぐっ……」

「ねえ、折角だから4人で撮ろうよ!

黒崎くん、おねがい!!」

「あー、ハイハイ」

「ちょっと待て、俺は良いとは……」

「隊長、もう観念して下さい!

氷奈ちゃんはこっちね」

「……ハア……」

日番谷も如月も押しには弱い。
そのため結局二人に流されるのだ。

黒崎は女に逆らうと後が面倒臭いという事を知っている。
特に今回は強敵だ。

大人しく従っておくに限る。

井上に渡されたカメラを構え、レンズを覗き込んだ。

思い思いのポーズで撮影の瞬間を待つ二人。

しかし如月は腕を組んで無表情のまま。

日番谷に至っては拗ねたように顔を背けている。

「……………撮っているのか……………?」

どうしたらいいものか迷う黒崎。

そんな彼に気づいた井上は、何を思ったか日番谷の首元に腕を回
し

「冬獅郎くん、ちゃんと前向かなきゃ！」

「ちよっ、おい井上！」

頭を横から思い切り抱き締めた。

文句を言おうと慌てて井上を見上げる日番谷。
しかしタイミングが良いのか悪いのか……

「ズルい織姫、あたしも」VV」

「まっ、待て松もっ……」

井上と向かい合った状態で背後からの思わぬ衝撃。

巨乳二人にサンドイッチされた日番谷の頭は、あっという間に見えなくなった。

「……浅野あたりが羨ましがりそうな光景だな」

「日番谷君にしてみれば死活問題だよ、黒崎」

「だろうな、と思う。」

「だって今まさにもがいてる。」

二人の間から動く手が見える。

「今のうちに撮っちゃいなさい一護！」

「いや、でも冬獅郎見えな」

「ほら氷奈、あんたも入んなさい！」

「えっ！？ わ、私は……っ！」

「おい、ちよっ……っ！」

見事に巻き込まれた如月。

間に挟まれたちびっこ二人は、もはや足掻く気力も無いのか停止したままだ。

「ほら、早くしなさい一護！」

「……撮って、いいの……？！」

「イツチゴオ〜！ 置いてくなんて酷いじゃないかあ……って……
ままま松本乱菊お姉様ア！？」

「僕達も一緒にいいかな？」

「浅野に水色じゃねえか。」

（また厄介なのが来やがった……）

「お……俺のオアシスが……俺のキュートピアがあー……」

「煩いですよ、浅野さん」

「敬語やめてえーっ!!」

ぎゃんぎゃんと騒ぐ彼等を他所に、おいてけぼりを食らったメン
バーは無関心を装い、各自弁当を広げ始めた。

「さて、僕達はお昼にしようか」

「俺らまだ自己紹介してねえよな？」

「いいんじゃない？ 落ち着いてからで」

「そつだな」

結局、彼らが記念撮影を終え無事食事にありつけたのは
それから何分も過ぎた後であった。

(松本のヤロウ……………後で覚えてるよ……………)

逃げてばかりじゃ始まらない。

後悔してばかりじゃ始まらない。

たとえ、どんなに辛い現実だとしても

進まなければ、道は見えない。

are
Story 5 · Presentiment of Nightmare

「なんで俺らが居残りで、冬獅郎とルキアはお咎め無しなんだよ」

「日頃の行いだろ」

一日の授業も無事に終わった放課後。

二時間目の時に結局課題の提出が遅れてしまい居残り学習を言いつけられた黒崎達だったが、日番谷と如月、朽木だけが何も言われず帰宅準備を済ませていた。

先程から夕日を見つめている日番谷。

黒崎が話し掛ければ言葉を返してくれるものの、その瞳がこちらに向けられることはない。

射し込む朱に彩られた銀髪と翡翠は、幻想的に輝いて見える。

そんな彼の横顔が、黒崎にはどこか寂し気に見えた。

視線を少し横にずらせば、同じ色に染まった青銀の髪。

俯いていて瞳は見えないものの、日番谷と同じような表情をしているだろうことはわかった。

「普通は班長であるお前の責任だろ？」

「俺は班長を承諾した覚えは無いがな。」

それにプリントもちゃんと提出した」

「いつ実験やったんだよ!？」

「要は計算だろう？」

今回の場合、初めの数回記録が取れば後は大体予測がつく」

「いいのかそれで……」

教室に残っているのは彼らだけ。
他の生徒は既に帰宅を終えたか、部活に行っているかのどちらかだ。

石田と井上は手芸部でやると言って、課題を持って出て行った。

朽木は職員室に用事で阿散井はサボリ。

茶渡は浅野や水色と共に隣の班だった為無関係。
とっくの昔に帰ってしまった。

よって日番谷達がいなくなれば、必然的に黒崎一人となる。

それを気にしているのかいないのか、黒崎はとにかく話題を探そうと必死だった。

(本人は隠そうとしてるみてえだけど、な……)

やはり、記憶が無いと知らない一面を見せることもあるのだろう。
何気ない態度や言動に、瞳を伏せる瞬間。
どんなに小さな変化でも、よく観察していればすぐにわかった。

一見平気そうに見えるのは、彼が強がっているだけにすぎないの

だと。

「……………黒崎」

不意に、名を呼ばれる。

「なんだ？ 冬獅郎」

「朽木に何を聞いたか知らねえが……………あんま気にしてんじゃねえぞ」

そのまま視線だけがこちらに向けられた。

いや……………睨まれた、と言った方が正しいかもしれない。
鋭い光に一瞬言葉を無くす。

そして、理解した。

「……………なんの、話だ？」

咄嗟に誤魔化しの言葉を口にする。

話したくない事を無理に聞くつもりはないから。

知られたくない事だったとしたら、話題に出すべきではないから。

「惚けんな、てめえの顔に書いてあんだよ。

……まあいい、悪いが俺は帰る。

「寄りたい所があるんでな」

「は？　ちょ、ズリイぞ冬獅郎！　お前も手伝ってけ！」

「そんなくらい自力でやれ。じゃあな。

……行くぞ如月」

溜め息と共に、未だ外を眺めたままの如月に声をかける。
しかし先程までずっと日番谷について歩いていた筈の彼女が、振り返る素振りは見られなかった。

もう俯いてなどいない。

まるで夕暮れの光に捕われてしまったかのように　ただ一心に
空を見上げていた。

「……おい、如月？」

不審に思った日番谷が軽く肩に手を乗せると、驚きに見開いた青の瞳が二人の男を映した。

刹那、輝きが揺れる。

「……………どうした？」

「……………え、っと……………私？」

「は？」

「キサラギって……………私の事？」

今度は此方が驚かされる番だった。

一陣の風が、吹き抜けていく。

草木のざわめきが　遠く聞こえた。

「お前……自分の名前……」

「……貴方は、誰？ 私のトモダチ？」

「っ……！？」

そういう、ことか……。

重い“記憶障害”。

それは、記憶を失ってしまった事実そのものを指す言葉ではなく……。

「覚えられねえのか……何も」

だから、日記をつけていた。

再発を恐れてではない。

いつ忘れても、大丈夫なように。

「冬獅郎……」

「……」

忘れられてしまう事は、死ぬよりも辛いこと。
昔誰かがそう言っていた気がする。

仮に前向きに考えるとすれば、忘れられたらもう一度やり直せば
いいと言える。

だが、これではそれすらも……

「……日番谷冬獅郎。あつちは黒崎一護。
……お前の友達だ」

「友達……」

「ああ、そうだ。そしてお前の名は……」

……如月、氷奈だ」

朽木は彼女を“氷華”と呼んでいた。
つまり氷奈とは彼等にとって偽りの名。

それを自ら教えるという事は……幼なじみが消えた現実と向き合
わなければならぬということ。

もしも神様なんてものが実在するならば

何故彼にばかり、こんな表情をさせるのか。

こんな決断をさせるのか。

「……………ごめんなさい……………。
思い出せなくて……………」

「いや……………構わねえ。」

……………お前の日記あるだろ？
明日、一人ずつ名を書かせよう。
俺から話しておいてやる」

「……………うん」

「……………さ、行くぞ。」

校門で松本達が待ってる」

鞆を抱え直し、今度はちゃんと日番谷の後を追いかける如月。

彼の鞆を持たない方の手をチラチラと気にかけていたが、それに気づいた日番谷が彼女の手を取ってやると、すぐに笑顔が浮かんだ。

「日番谷殿……お帰りになるのですか？」

「まあな。朽木、後は任せた」

「わかりました。

日番谷殿、如月殿も……お気をつけて」

「……………ああ」

朽木が戻ったのだろう、廊下から話し声が聞こえた。

そしてその数秒後、入れ違うように入って来た朽木。まるで感情が伝染したかのように、眉を潜めていた。

「遅かったな、ルキア」

「……………ちよっと、な。それより一護」

「なんだ？」

真っ直ぐに向けられる漆黒の瞳。

垣間見える決意の色。

「……………話がある」

「大分日も落ちて来たな……………」

「そうですね。」

さっきまで夕日が綺麗だったのに、なんだか雲も出てきたみたい
ですし……………きつと今日は星見えませんね」

「それは仕方ないだろう。」

ところで如月、お前……………自分の家が何処にあるのか覚えてるのか
？」

浦原商店への別れ道。

ただついて来るだけだった如月に問い掛けると、返されたのは小
さな否定。

「隊長……どうするんです？」

「……俺は今から浦原商店に行く。確かめたい事があるんだ。

松本、如月……お前らも来い」

「はい」

すぐに了承の意を示した松本と違い、首を傾げている如月。

恐らく今は、浦原商店のことすらも記憶に無いのだろう。

「二時間目に見せてもらった時……お前の日記に連絡先が載っていた。

奴ならお前の家も知っている筈だ。

どうせ俺も元々立ち寄るつもりだったからな……迎えに来させるより、このまま向かった方が速い」

「……わかった」

彼女が頷いたのを確認し、今度は斑目達に視線を向ける。

「斑目と綾瀬川は、空座町の見回りに向かってくれ。」

この天気だからな……簡単でいい。それが終わり次第、今日は帰って休め。」

だがもしも虚が現れたら、その時は討伐後一度俺に連絡しろ。総隊長には此方の件と合わせて、俺から後で報告しておく。」

阿散井は先に行って、簡単にでいい……浦原に話をつけておけ」

「……はっ！」「」

何処から行く？

取り敢えず向こうから回るか……

各々動き出す面々。

その様子を眺めながら、背後の歩道に視線を移した。

不自然な程に人気の無い空間。

両脇に植えられた街路樹が、音を立てて揺らめいた。

暗闇に舞い散る木の葉。

まるで「己」の心のようだ、それらが静まることはなかった。

(……嫌な予感がする……………)

自分の感はよく当たる。

それが悪いものであれば尚更。

(今回ばかりは、杞憂であってほしいんだが……………)

「たいちよー、行きますよー?」

「……………ああ……………今行く」

松本に手を引かれ歩く如月。

その一番後ろを、ゆっくりと歩き出す。

彼の姿は広がる闇に溶け込むように

やがて音もなく消えていった……。

「よく来たの、日番谷」

「四楓院夜一か」

「何をしておる、さっさと入れ。」

中で喜助が待っておるぞ」

「……ああ……失礼する」

浦原商店奥の居間へと通された俺達。

そこには既にお茶の準備がしており、浦原喜助と握菱テッサイが控えていた。

「これはこれは日番谷隊長、お久しぶりっス」

「ああ、悪いな突然」

「いや、いいんスよ。此方も手間が省けましたし」

敷かれた座蒲団に俺達が腰掛けるのを見届けながら、用意したお茶を一口啜る浦原。

阿散井はここにはいない。

さっき見かけたが、どうやら表の掃除を言いつけられたようだ。どこぞの主婦のような格好で、本人なりに頑張っていた。

「日番谷隊長達が一緒にということは、如月サン無事に学校行けたんスね。」

「いやーよかったよかった、ずっと心配してたんスよお」

「浦原、その話の前に……」

隣に居る如月に視線を移す。

顔見知りの筈のだが、警戒しているのか先程から俺の制服を握り締めている。

「こんな状態で引き離していいものか……そうは思うのだが、今回は聞かれるわけにはいかない。」

彼女には今、記憶が無いのだから。

「……わかりました。」

「テッサイ、彼女をウルル達の所へ」

「承知しました。行きますぞ、如月殿」

制服を握る手に力がこもる。

俺は一つ溜め息を溢すと、如月の頭に手を置きながら、出来る限り優しく言い聞かせるように声をかけた。

「話が終わったら、ちゃんと家まで送ってやる。だから少しの間、向こうで花刈達と時間を潰しててくれ。後で呼びに行く」

「……」

「……氷奈ちゃん。隊長の言うことが信じられない？」

「……わかった、待ってる」

数秒の間。
離れていく小さな手。
遠くなる背中に、少しだけ罪悪感を覚える。

ほんの数分離れるだけ。

今はまだ、余計な話で混乱させたくない。

これも全て、あいつを護るため。

もう二度と、手放す事の無いように……

(執着してるのは、俺の方が……)

昔からそうだったかもしれない。

彼女が離れたがらないのではなく。

俺が、離したくないだけか……。

「凄いつスねえ、日番谷隊長。」

すっかり彼女のお気に入りじゃないスか」

「あんた達には……？」

「いやもう全然。」

ジン太とウルルは平気なんスけどね？

彼女、あの通りすぐに忘れてしまいますから……アタシ達には慣れて下さらなくて」

「俺も駄目じゃ。」

まあ少しでも年が近い方が、なにかと安心なんじゃろっ」

「……そうか」

もう、1年くらいにはなるんスけどね。

そう言って口元を扇子で隠し能天気には笑う浦原の目は、俺にはどこか寂しそうに見えた。

「それで、お話というのは……やはり彼女について………ですよね」
「？」

「ああ」

出されたお茶に口をつける。
いつも執務室で飲んでいるのと同じ、程良い濃さで落ち着いた。

「……先程1年と言ったな。浦原、お前は如月とどういう関係がある？

あいつの事……どこまで知っているんだ」

「氷華が現世に来てから90年経つわ。

あたし達は『如月氷華は死んだ』と、そう聞かされていた。

あの子に何があったの？

今まで、どこで何を……

なんでもいい、情報があるなら教えてちょうだい」

俺の言葉を引き継ぐ松本。

何の説明も無しに連れて来たが、どうやら言いたいことは伝わっていたらしい。

伊達に長いこと副隊長をやっていない。

「……わかりました、順を追ってご説明しましょう」

戻って来た握菱テツサイを隣に控えさせ、改めて口を開く。

「確かに、先程アタシは1年と言った。

ですがアタシが実際に彼女を発見したのは今から90年前……丁度事件があった数日後の話っス」

偶然このすぐ近くで大虚が発生した気配がありましてね、討伐に向かったんスよ。

その時、大虚に襲われていた一人の少女を見つけました。それが、如月サンだったんス。

「日番谷、如月の斬魄刀……持っておるな？」

「ああ。既に折れちまっているが、な。刑軍から手渡されている」

「それは恐らく、その時に落としたものでしょう」

「落とした……」

「……話を続けます」

アタシ達はすぐに大虚を倒し、如月サンを連れて浦原商店（こゝ）に帰って来ました。

そのまま彼女の治療をしようと思ったんですが……突然如月さんを包み込むように氷が現れ、そのまま彼女は結晶の中に“封印”されました。

「斬魄刀も無いのに、そんな事が……」

「力がそれだけ強ければ、有り得ない話じゃないんすよ。まあ稀なケースではありますが、ね」

封印された状態では、霊圧は漏れません。ですから、尸魂界も気づけなかった。

恐らくは、傷が完全に癒えるまでの防護策のつもりでしょう。

その氷は2年前に溶けました。

ですが目を覚ました彼女には……既に記憶はありませんでした。

勿論戦い方もわからない。

ですが仮にも元護廷隊の死神じゃないっすか。

霊力も相当に高く、虚にとってはいい力モとなっております。

ですから急遽用意したんす。

霊圧を隠す鬼道を合わせて作った、特殊な義骸を……。

「じゃあ、霊圧が感じ取れないのは……」

「ええ、その義骸のせいっす。

霊圧が無くなったわけじゃありません」

「……そうか」

「ですが死神の能力を失っている以上、今まで通りの生活は出来ない。

瀟霊廷にも居場所なんてないでしょう。

戦えない死神なんて必要ありませんから、降格……最悪追放されてしまうだけっす。

そこで少しづつでも現世に馴染ませるため、アタシ達で学校に通わせることにしたんすよ」

「でも待って、なんで高校に？ あの外見なら、小学校の方が馴染みやすいんじゃない……」

「……あ、隊長の事言ってるんじゃないですよ？」

「確かに無理があったかもしれないの。

「じゃが、高校の方が護衛をつけやすいと思ったんじゃ」

「護衛？」

「それは後でちゃんとお話します。

とにかくアタシ達は、陰ながら彼女の現世生活をサポートしていた訳ですよ。

ですが……」

1年前、彼女は何者かに襲われ重症を負った。

アタシ達も助けに向かったんですが、間に合わず……

偶然その場に居合わせた通行人が病院に連絡したため、彼女はそのまま空座総合病院に入院となりました。

普通の人間が重症のまま突然回復するのはおかしい。

つまり運ばれてしまった以上、アタシ達が下手に手出しするわけにはいかないんす。

幸いあそこの院長は死神の事もご存知っすから、アタシ達はひとまず様子を見ることにしました。

原因はわかりませんが、身体的よりも精神的ダメージの方が大きかったらしく……それから1年経ってようやく退院したが、昨日です。

それからは、日番谷隊長もご存知の通りっスよ。

浦原の話を聞いて、納得したと同時に悔しかった。

その場に自分がいられなかったこと。

嫌な予感が的中してしまったこと。

「襲われたということは、如月は……」

「狙われてるっスね。」

風音サンからも報告を受けてますんで」

「風音？」

「先程話したじやろう？」

如月の護衛を任せている奴じゃ」

「元八番隊隊士の、藤堂風音サンです。」

「110年前、アタシ達と一緒に追放されました。呼べば出て来る
と思いますよん?。」

そう言って風音の名を呼ぶ浦原。

それとほぼ同時、襖を開けて静かに入って来たのは、茶色の髪を一つに纏めた黒い目を持つ女性。

「彼女が、風音さんっすよ」

「初めまして、日番谷隊長。松本副隊長。

空座一高校に三年生として通っています、藤堂風音と申します。

この度は如月氷奈の護衛も兼ね、勝手ながらずっと後をつけさせて頂いておりました事を、ここでお詫び申し上げます」

「ずっと……？」

自分達だって隊長格。

それがその存在にまったく気づけなかった。

余程霊圧操作に長けている証拠。

（まさか、来る途中微かに感じた気配は……？）

この女、だったのだろうか……。

「流石のお主でも気づけなかったか。」

まあ仕方あるまい。風音は昔から戦闘能力は未熟じゃったが、霊圧操作に長けておったからの。こやつが一度隠れたら、隊長格でさえ見つけ出すのは至難の技。

また少し上達したのではないか？」

「お褒めに預かり、光荣です。四楓院様」

「夜一でよいと言っておるつに」

風音の背中をポンポンと叩く四楓院。
しかし彼女の表情、態度……全て変わらないままだった。

「そついえば、氷奈の名前って……」

「ああ、それは彼女の生前の名前っス」

「生前？」

「お前、如月の過去を知って……？」

「ええ知ってますよ、アタシ達皆。」

彼女を魂葬したのはここにいる風音サンです。それに如月サンだけではない。

「日番谷サン……貴方の事も、ね」

「……な、に……？」

俺の知らない過去。

浦原の知っている過去。

俺達の繋がりは

そこから始まっていた……。

* * Story · Rain of uneasiness *

繰り返される輪廻。

産まれては死に、消えては生まれ。

そしてそれは時に、一つの奇跡を引き起こす……。

Story · Rain of uneasiness

「でもびっくりだわ。」

隊長と氷華^{ひょうか}って、現世^{げんせい}でも一緒にいたんですねえ

あの後浦原から聞いた新事実。

「虚に襲われていたお二人を助けて尸魂界に送ったのは、アタシ達なんすよ」

(爆弾発言にも程があるだろ……)

尸魂界に来る前から一緒にいたなんて。

一体どんな運命の巡り合わせだろうか。

「しかも雛森まで一緒だったそうじゃないですか！ 良いなあ、あたしも混ざりたかったあ……」

幼なじみとして育った三人が、偶然にも一緒に暮らしていたとは。

「お前がいても鬱陶しいだけだ」

「あつ、酷い隊長。」

……でもなんか運命感じませんか？

出逢うべくして出逢ったみたいなのVV」

「……んなもん感じねえよ」

「またまたあ、ほんと嬉しくせに」

「……黙れ」

浦原商店から如月の借家に向かう途中、何故か嬉しそうに話し出した松本。

というかコイツは、その如月氷華が今隣で歩いているということ
を忘れてるんじゃないだろうか。

(如月の前で、尸魂界ていじんの話はすんなつってんだろぅが……)

向こうの名前を出さなけりゃいいって事でもないだろぅに。

何べん言っても聞きやしない。

コイツは本格的に、いっぺんシメた方がいいのかもしれない。

「日番谷君」

「あ？」

「ヒョウウカって誰？ ヒナモリって……？？」

（ ……ほらな ）

如月が興味持つような話をベラベラと……

「俺の幼なじみだ。松本」

「はい？」

「テメエもう喋るな」

これじゃあなんの為に如月を離しておいたか分からない。

少しばかり霊圧を上げてやれば、すぐに口を閉ざした。

そんな所だけは物分かりがよくて助かるんだが……。

(いつもこうだといいんだけどな……)

正直、かなり切実である。

ポタ、ポタ……サアアアア……

空から落ちた雫が、徐々に地面を濡らしていく。

雨音が、響き渡る。

「とうとう降って来やがったか」

「急ぎましよう隊長！」

「如月、走れ！」

「うん……！」

アパートまでもう少し。

走れば本降りまでにはなんとか間に合うだろう。

女の体は冷やすとよくないと聞くし、風邪を引かせるわけにもいかない。

如月のペースに合わせながらも、なるべく急いで借家を目指した。

-
-
-
-

「ここだな……」

浦原に教わったアパートの下に辿り着いた頃には、全身がすっかり濡れてしまっていた。

確かに本降りには間に合い、体も少し冷えた程度。

けれどいつもは上げてる髪も水の重みですっかり下がり、首元に張り付いて気持ちが悪かった。

「あややだ隊長、髪降ろしてると女の子みたい」

「うるせっ！……如月、大丈夫か？」

「……なんとか」

視界の妨げとなる銀髪を掻き上げながら如月の方を見ると、彼女も丁度長い青銀の髪をうっとおし気に払っているところだった。

129

「お前の家はこの3階だ。

後は表札を見れば分かるだろう。

風邪引かないように、早めに風呂入って寝ろ」

上へ上がるための階段を指で差し示す。

如月が頷くのを確認すると、その場で紙と筆箱を出し、ケータイ電話とやらの連絡先をメモして手渡した。

（この間松本に渡されたものだ）

「何かあったら、ここに連絡しろ」

「わかった。」

わざわざ送ってくれて有り難う」

「ああ。じゃあな」

「おやすみなさい」

その言葉に、片手を上げて返す。

そのまま彼女の姿が見えなくなるまで、その背中を見送り続けた。

「……さてと……あたし達も帰りましょうか、隊長」

「そうだな。この調子だと、井上の家まで瞬歩でギリギリ……って
と」か」

「髪の毛傷んじやったらどうしょ」

「知るか。まだ軽いうちに戻るぞ」

自分の長い髪を大切そうに撫でながら口を尖らせる副官を一眺しながら、再び雨の中足を踏み出そうとする。

しかしそれは、途中で止められた。

「お待ち下さい」

「！……あなた、確か………」

振り返ると、いつの間に来たのか藤堂風音の姿。

その手には傘が2本握られている。

「また雨の中走るのもお疲れになるでしょう。よければお使い下さい」

「しかし………」

「大丈夫です。」

今、そのコンビニで買って来たものだから」

差し出される傘。

躊躇った時間は、ほんの数秒。

断る理由も無かった。

「本当！？ サンキュー、助かったわ！

あんた結構良い奴ね」

「……礼を言う」

彼女の手からそれを受け取れば、風音は優しく微笑んだ。

「お二人のお力になれたのなら光栄です。
では、私はこれで……」

……一瞬。

彼女の姿は、瞬きの間に消えていた。

「はや……隠密機動でも充分やっていけるんじゃないかしら」

「案外そっちに属していた時期もあつたりしてな」

「でもよかったですね。」

風音が護ってくれてるって。

あたし達も氷華と四六時中一緒にいられるわけじゃありませんし

……これなら少しは安心出来ますね」

「……………帰るぞ」

今度は、ちゃんと傘をさして。

「さて、帰ったら書類の続きやんねえとな」

「隊長つてばまた仕事ですか？ 授業中もやってたでしょう。」

この間、隊長の机から見つけました。

こっちにいる間くらいゆっくりしましょうよ。破面が動き出した
らそれどころじゃなくなっちゃいますよ？」

「人の机勝手に見てんじゃねえよ。」

しょうがねえだろ。俺達が留守の間、本来十番隊で処理すべき仕

事を他隊にも一部請け負ってもらってるんだ。

俺だって少しくらいはやらねえと悪いだろうが」

「とか言つて、今までは隊長も自分の仕事が早く片付いた時は、他隊の仕事持つて来たりしてたじゃないですか。書類提出に行つたと思えば新しい仕事持つて来て。

昼寝する時間はちゃんと確保してるあたり、流石だとは思いますが……隊長、あまり休む気無いでしょ」

「……………」

「……………ほんと真面目なんですから。」

無理しすぎて倒れないで下さいよ?」

「……………わかつてる」

移り変わる町並み。

一歩進む毎に、水溜まりが音をたてて。

家路を急ぐいくつもの人影。

尸魂界とは違う景色。

うつすらと口角を上げれば、暗い空を見上げた。

雨はまだ、降り続けている。

それでも。

「よそ見ばっかしちゃって。

たいちよ、途中で拐われたりしないで下さいね?」

「うるせえよ」

水色がかつた透明傘。

そのフィルター越しに見た空は

ほんの少しだけ、明るく見えた。
。

* * Story 8 · The dark that began to move

翌朝、7時30分。

アパートを出た如月が一番始めに見たものは、階段横の壁に凭れ掛かり、伝令神機を操作する小さな少年

日番谷冬獅郎の姿だった。

Story 8 · The dark that began to
move

「おはよう、如月」

「おはよう。……えっと……」

「日番谷だ。」

「やっぱり一人じゃ危ねえと思ってな、迎えに来た。学校行くぞ」

「うん」

伝令神機を閉じ、如月に一眺を向けてから歩き出す。

彼女には護衛がついている。

わかっていても、不安は拭いきれなかった。

どんなに戦闘慣れした人物だとしても、一人では対処が難しい事態もあり得る。

だからもしもの時に自分が護れるよう、送り迎えをすることにした。

松本と井上には、昨夜のうちに話をつけてある。

用意した弁当は、自分の分だけ。

(あの二人の味覚は、悪いが理解出来ない)

「昨晚、何か変わった事は？」

「特には……」

「そうか、それならよかった」

横断歩道に差し掛かり、車が無いことを確認してから歩き出す。

如月が狙われているのは確実だろう。
けれど今のところは、なんの動きも見られない。

入院期間中は何事も無かったという話から推測すると、様子を見
ているか或いはなんらかの不都合が起こっているのか。

(まさかあいつら……じゃ、ねえよな………)

懐かしい面影が脳裏に浮かぶ。
まだあの場所にいた頃と、事件の日と。

違う、とは信じたい。
けれど仮にそうだとしても……

(同じ過ちは、繰り返さない……絶対に)

固く、拳を握り締める。

その時だった。

ブ
ロ
ロ
ロ
ロ
……

「危ねえ、冬獅郎!!」

「!!?」

近づくエンジン音に日番谷が気づいたのと、そんな彼の名を叫ぶ
声が聞こえたのは、ほぼ同時だった。

咄嗟に左を振り返ると、そこには

キキイイイイツ……!!

1台のトラックが、迫っていた。

(なっ……!!?)

猛スピードで突っ込んで来るそれ。

眩いライトに照らし出され、銀髪が金色に反射する。
間近に聞こえるブレーキ音。

しかし止まる気配は無い。

加えてあの大きさ。

直接当たってしまえば致命傷は確定だろう。

霊圧を使えば片手でだって押さえられる。

けれどこれだけの破壊力を持つもの相手ではそれなりの量が必要だ。

何の力も持たない人間に耐えられる筈が無いし、加減を誤れば逆に車を吹き飛ばしかねない。

瞬歩を使えば避けるのだって簡単だ。

だがここは町中。

まだ人通りが疎らとはいえ、こんな場所で義骸のままそんな芸当を行えば何を言われるかわかったもんじゃない。

慌てて信号を確認する。

まだ、青のままだった。

「チツ……………！」

咄嗟に如月を抱えると片腕をバネにして前方に跳び、一回転しながらも空中で体勢を整え滑るように着地した。

トラックはそのまま数メートル程進んだあたりで急停車。運転していた男が慌てて降りようとしているのが見えた。

「無事か、冬獅郎！」

「黒崎！ お前、なんでここに……………」

真っ先に駆け寄って来たのは、いつもならいる筈のない男、黒崎一護。

時間だって大分早いのに。

「あイヤ……………ちょっと、気になったからよ……………； あー、あれだ

あれ！ 虫の知らせってやつ、か……？」

「聞くな。大丈夫か如月」

「う……うん………」

ゆっくり地面に降ろしてから、怪我の確認をする。

幸い、どちらも掠り傷一つ負ってはいなかった。

「大丈夫ですか!？」

必死な形相で謝罪する運転手をどうにか落ち着かせる。

理由を聞くと、曰く“残業続きでブーツとしていて、誤ってブレーキとアクセルを踏み間違えた”らしい。

危ないと気がついた時には、既に日番谷のすぐ側にまでトラックが迫っていた。

これは、所謂居眠り運転のようなものだろうか。

慌ててブレーキを踏んだが間に合わず、そのまま突っ込む形になってしまった。

「まあ怪我したわけじゃねえからな……問題無い。今後は、気を付けて下さい」

責める事はしなかった。

このまま警察沙汰にでもなられたらそれはそれで面倒だし、別に被害があつたわけでもないのだ。

相手側に非があつたのは事実だが、見たところ反省はしている。これ以上追い詰める必要もないだろう……そう判断しての対応だった。

「よかつたのか？ 冬獅郎」

「なにも反省してる相手に追い打ちをかけることもないだろ。いつまでも根に持つような事じゃない。それと日番谷だ」

「……冬獅郎らしいけどな」

「日番谷君……ほんとに大丈夫？」

「だから大丈夫だって。
俺はそんなに柔じゃねえよ」

運転手と別れてからというものの、二人から繰り返される“よかつたのか”と“大丈夫か”という言葉。

今の段階でこの状態では、松本まで伝わるのも速そうだ。

その後を想像して気が重くなると同時に、今回の出来事がただの事故でよかつたと　そう思った。

『一護、お二人から決して目を離すな』

あの後言われたルキアの言葉。

気になって来てみれば、まさかこんな事態になるうとは。

(ただの事故なら、いいんだけどな……)

確かに、相手はごく普通の人間だったが。

『もしかするとお二人は、命を狙われているかもしれない』

如月だけではない。

日番谷冬獅郎も、同じように狙われているのだ。

そう、ルキアは言っていた。

本人は、まだ分かっていないようだが。

(まあ、冬獅郎の方は俺が気をつけとくしかねえか……)

氷奈の事は冬獅郎が護る。

それなら俺は冬獅郎を護る。

(なんだかよくわかんねえけど、敵でも虚でもかかって来やがれってんだ　！)

『私も、あまりはつきりとは覚えてはおらぬのだが……それでも引つ掛かるのだ。90年前のあの事件が……』

ルキアが語った事件の一片。

90年前。

日番谷と如月、二人の失踪。

そして……

「瀟霊廷を襲った？」

「ああ……」。

勿論我々は全力で止めた。

しかし次に目を覚ましたお二人に、その時の記憶は無かった。その件は一時保留となり、まずはお二人の休養が求められた。しかしそれから3年程経った頃だったか……突然日番谷隊長の霊圧が暴走したのだ」

暴走。

あの、日番谷の霊圧が。

「それから後の事はわからない。

情けない話だが、私も巨大な霊圧に耐えきれず、意識を失ってしまったからな。気がついた時には、日番谷隊長は牢に……。

浮竹隊長は、流魂街を数地区壊滅させた事が、投獄に至る一番の原因だと仰っていた。

だが事件が起こる数刻前、何者かの人影を十番隊舎付近で見かけた気がするのだ。

それは、十番隊士数名も証言している。

四十六室には信用するに値するものではないと判断されたが……私にはあのお二人が、進んでそのような事件を起こしたなど……到底思えぬのだ。

日番谷隊長も、如月殿も……信頼出来るお方だ。誰かがお二人を陥れるために仕組んだ、罠だったのではないかと……」

「その人影が、事件の首謀者かもしれないって事か」

「ああ。

隊長達ならもつと詳しく知っているだろうが……一度は闇へと葬り去られたのだ。

「今更、話していただけるかどうか……」

「冬獅郎が言うわけねえもんな。

……浮竹さんや京楽さんなら、協力してくれんじゃねえか？」

「……そうだな。お二人には折を見て、私から伝えておこう。取り敢えず、今暫く様子を見たい。

一護……協力してくれるか？」

「ああ、わかった」

遡る。

悲しみに閉ざされた90年の歴史を。

「あーあ、失敗しちゃった」

「仕方ないよ姉さん、あれはただの人間なんだ。日番谷冬獅郎には

勝てるわけないって分かってた。

低能な奴らにはあれが限界だよ」

「そうね。」

いいのよ、どうせこんなものただの余興に過ぎないんだから。

そして分からせてあげるの。

貴方達はもう、この舞台から降りられないんだってことを……ね」

そう。

これはまだ、余興に過ぎない。

全てはまだ、始まったばかり。

* * Story 9 · You are worried * *

「隊長！ 今朝車に轆かれかけたって本当ですか！？」

「……………松本……………」

中休み。

予想通りというかなんとか、やはり松本は来た。

それはもう扉が壊れるんじゃないかってくらい、物凄い勢いで。

ついでに浅野を吹っ飛ばしながら。

Story 9 · You are worried

「それで、ほんっとーに怪我とかしてませんよね？」

「ねえよ。どうせ黒崎にでも聞いたんだろ？　ちゃんと確認もしたし痛みも無エ。」

「だからいい加減顔を離せ松本」

近い。

そう言っつて冷静ながらも仰け反る日番谷。

そんな彼の体を、前から後ろからジロジロと睨むように眺める松本。

端から見ていると不審者極まりないが、当の本人は至って真面目。

日番谷の隣にいた如月の事も同じように確認してから、深く溜め息を吐いた。

「もう……こんな事ならあたしも一緒に行くんだったわ。」

隊長、なんで起こしてくれなかつたんです？」

「昨日の段階では来る気なんて微塵も無かつたくせに、よく言っぜ……」

「これで隊長にもしもの事があつたらあたし、今からでもその相手探しだして取っ捕まえて、灰猫で殴り飛ばしてるところです！」

「おいおい、それはやりすぎ……」

バンバンと机を叩きながら、必死に訴える副官。（机が壊れやしないだろうか）

黒崎がさり気無くツッコミを入れているが、それも無視だ。というか恐らく耳にすら入っていないだろう。

「落ち着け松本。他の奴らに聞かれるぞ」

「……すみません。」

でも、今は流石に大袈裟としても、ほんと気をつけて下さいよ？ 相手は人間みたいですし、隊長なら大丈夫でしょうけど……あたし、一応心配してるんですからね」

「ああ、わかってる。すまなかつたな」

「いえ、隊長が無事ならそれで」

先程までの様子から怒っていると思ったのか、微かに眉を潜め困った顔をしていた如月。

松本が視線を向ければ、一步後退るのが見えた。

「氷奈ちゃんも気をつけてね。」

外は危ないから……一人で出歩いちゃ駄目よ？ 隊長みたいに迷

子と間違われちゃうかもしれないから」

「迷子？」

「おい」

如月の頭を撫でながらぬけぬけと発言する松本。

上官の目の前でこんなことを堂々とと言えるのは、現世にいる中では恐らく彼女くらいのものだろう。

これに関しては黒崎達も感心している。

(黒崎も充分言っている部類には入るが)

というか……

「ちょっと待て、誰がいつそんなもんに間違われた。

デタラメ言ってるじゃねえぞ松本」

「いやだわ隊長、冗談ですよ冗談！」

「如月が本気にするだろうが」

「日番谷君、迷子になったの？」

「……………ほらな……………」

こいつは昔からそうだった。

警戒心は人一倍強いくせに、一度信用してしまうと余程の事が無い限り疑わない。

だからこの手の嘘にはすぐ騙されていた。

(特に松本や雛森が発信源のもの)

「なんつーか……平和な光景だよな」

ぎゃいぎゃい騒ぐ子供二人とお姉さん。

もしくは三毛猫一匹と白猫二匹。

(黒崎にはそう見える)

言ったら殺されるから言わないが、なかなか和む図である。

しかしそんな平和も、突如打ち切られる事となった。

「なあ乱菊さん」

「ん？ なによ一護」

「ちょっと話が……」

「……」

黒崎が松本に話し掛けたのとそれは同時だった。

いち早く何かの気配に気づいた日番谷が、窓の外を凝視する。

直後に鳴り出した伝令神機。

彼がズボンのポケットから取り出して見れば、ここから少し離れた所に数体の低級虚の反応があった。

「虚か。何処だ？」

「樁台の辺りだな。」

「集団で移動しているらしい」

黒崎の問いに冷静に答えながらも、体が倒れないよう一度椅子に座り義魂丸を飲み込んでいる日番谷。

義骸から抜け出た死覇装姿の彼は、そのまま窓枠に手をかける。

「隊長」

「いい、相手は最下級虚だ。俺一人で行く。
お前らは残って、ここの守護にあたれ」

「……わかりました。お気をつけて」

「キング、お前は……あー……屋上にも隠れてる」

「はいなのだ」

ピシッと敬礼をして教室を出ていく冬獅郎……もといキング。

敵との戦いの度に、ゴミ箱だの自動販売機だのポストだの、その
辺にあるものに片っ端から隠れようとする彼だ。

(そのせいで逆に怪我をして帰って来たこともある。

それ以来冬獅郎は彼を馬鹿だと認識した)

毎回言い合う二人が印象に残っているからか、些か不安が残る。

が、確か屋上にはそんな変な隠れ場は無かった筈。

大丈夫だろう……多分。

「昼休み、全員弁当と筆記具を持ってここに集合だ。

今いない奴にも伝えとけ。

石田や井上、茶渡にもな」

「待て冬獅郎、俺も行く」

足を掛けて今にも飛び出しそうな様子の日番谷。
それを黒崎が呼び止めた。

その声に動きを止めた彼は、渋々といった様子で振り返る。

「日番谷だ。黒崎、俺は一人で平気だと……」

「じゃあ俺が行きたいから行く。それならいいだろ？ どうせ二人
でやった方が早く終わるんだ、連れてけ」

「……………好きにしろ」

「おう」

「ちょっと一護、あんた話あるんじゃないの!？」

「悪い乱菊さん、後でまた声かける!！」

そのまま窓を乗り越え、瞬歩で立ち去る日番谷。
その後をいつの間にか死神化したのか、黒崎が追っ。

(護るって、決めたからな)

一人になんかさせない。

俺が、傍にいてやるんだ。

ルキアの為にも、冬獅郎の為にも。

そして俺自身の為にも。

“十”と染め抜かれた羽織を靡かせる後ろ姿を視界に入れながら、
そう意気込んだ。

(一護……隊長をお願いね……)

二人が立ち去った後を無言で見やる松本。

如月も暫くは心配そうに外を見つめていたが、日番谷がいなくな
った今誰とも話す気が無いのか、さっさと席に戻ってしまった。

元々自分達のこと、日番谷の存在があつたからこそ受け入れて
くれていたようなものだったし、まだ完全に心を開いてくれていな

いならこの態度も仕方がない。

再び、深い溜め息が溢れた。

「松本副隊長」

「ん？ ああ朽木じゃない。

何処行つてたのよ？」

入り口の所から自分を呼ぶ声に振り返れば、朽木が困ったように立っていた。

ふとその後ろを見やると、そこには藤堂風音の姿。

「あなた……」

「あの……こちらの方が、今朝の件で一言謝罪したいと……」

「……そう、わかったわ。有り難う朽木」

休み時間終了を告げるチャイムが鳴る。

(あたしも、サボり決定かしらね)

深々と頭を下げる風音を促し、松本も教室を出て行った。

オマケ

「楽園が……綺麗な花畑が見える……」

「大丈夫？ 啓吾」

「飛んでる……水色……俺は、飛んでるぞー……ハハハー」

「……頭ぶつけておかしくなっちゃったのかな？
浅野さん、帰って来て下さいー」

「ちょっとあんた、邪魔よ！ー」

「へぶっ！ー！」

「あ」

廊下に倒れたままだった浅野啓吾。

その背中に本日二度目の衝撃を受ける事になるのは、チャイムが鳴った、すぐ後のことである。

* * Story 10 · Dubious * *

同時刻、尸魂界。

それは吸い込まれそうな程の青空が広がる、気持ちの良い朝の事だった。

Story 10 · Dubious

瀟霊廷、一番隊隊首室。

ここに、今現在尸魂界に残る全ての隊長が揃っていた。

「これより、隊首会を執り行う」

二列に並んだ隊長達。

その中心に堂々と腰を据えているのは、一人の老人。

張りつめた空気の中　　総隊長、山本元柳斎重國の声が重々しく響き渡る。

彼は、今は空席となった三番・五番・九番隊長の整列場所に順々に視線を送ってから、少し前まで十番隊の小さな隊長が凜とした姿勢で立っていた筈の場所に目を止めた。

「藍染惣右介との決戦に備え、現世にて空座町守護の任に着いておる日番谷隊長から、今朝がた報告があった。

今回の議題はその報告内容についてじゃ」

「何か、問題でもあったんですか？」

その言葉にまず反応を見せたのは、十三番隊長浮竹十四郎。彼は日番谷を自分の息子のように可愛がっている。

会う度にお菓子を与えては迷惑がられているが、日番谷の現世出立の際は更にお守りをいくつも渡していた。

安全祈願等とはもなく、合格祈願や安産祈願という字も見た気がする。

日番谷曰く、「なんで俺が出産しなきゃなんねーんだよ……」

女でも受験生でもない日番谷にはどちらも関係無い事で、それは現世にて迷わず井上と松本行きとなった。
(自分で買ったと誤解されるのが嫌で事情を話したところ、思い切り笑われたらしい)

そのため日番谷が何らかの事件に巻き込まれたのではないかと、心配しているのだ。

そんな彼を宥めようと口を開くのは、彼の同期で親友でもある八番隊長京楽春水。

「大丈夫、あの子は強いよ。」

それに見た目はあれでももう子供じゃないんだからさ。

あんまり心配していると、また日番谷君に叱られちゃっつよ?」

「ああ………そうだな」

「話を、続けてよいかの?」

再び静まり返る隊首室。

その様子を確認してから、元柳斎は改めて口を開く。

「元十三番隊第三席、如月氷華のことを……覚えておるな?」

「如月……ですか？」

如月氷華。

日番谷冬獅郎の幼なじみ。

他人との関わりが極端に少なく、日番谷の仲介無しでは手を焼く者も多かったと聞く。

90年前、日番谷と共に騒ぎの中心となった人物。

「日番谷隊長の報告によると、現世の高校にてそれらしき人物と遭遇したそうじゃ。

日番谷隊長自身が調査した結果……如月氷華本人であると確認した」

「なんだって!?!」

「ほう……」

「まさか、彼女が……?」

ざわめく隊長達。

そんな中、場を代表するよつに四番隊隊長卯ノ花烈がスツと片手を挙げた。

「静粛に。……なんじゃ？ 卯ノ花隊長」

「総隊長。確か私達は、彼女は“亡くなった”のだと聞かされていた筈ですが……」

そんな卯ノ花の言葉にすかさず割って入るのは、十二番隊隊長涅マユリ。

「その報告が事実だとすれば、それはつまり二番隊のミス……という事になるんじゃないのかネ？」

「なんだと！？ 貴様、私を侮辱する気か！！」

「なんだネ？ ワタシはただ事実を言ったまでだヨ」

「我々は、現場に残された如月氷華のものと思われる多量の血痕や所持品、戦闘の形跡からその可能性が高いと判断したのだ。

大体そう言う貴様だって霊圧を感知出来なかったではないか！」

「やめんか涅隊長、碎蜂隊長！」

ダァンッ
！！

「ペイツ、静かにせんか！ まだ話は終わつたらんぞ」

杖で床を打ち鳴らせば、再び全員が列に戻り元柳斎に向き直る。
涅と碎蜂も渋々口を閉ざし、大人しく身を引いた。

「碎蜂隊長の言う通り、儂らはその時如月三席の霊圧を感知出来ず、二番隊が持ち帰った僅かな手掛かりのみで全てを判断せざるを得ない状況であった。

そこで中央四十六室は、生存しているという確証も何一つ無いことから、“消滅した”と結論を出したのじゃ。

じゃが、如月は現世で確かに生きており、霊圧が外部に漏れなかったのは、現世に到着後怪我を負った如月が自ら封印状態となったこと。

その後浦原喜助によって、特殊な結界を張った義骸により強すぎる霊圧を隠し、保護されていたためであったと、報告書には記されておる」

「ほう……それはなかなか興味深いネ」

「保護……ですか……」

「ふむ……しかし一つ気掛かりな点があったの。
どうやら日番谷隊長が現世で遭遇した如月には、記憶が全く無い
ようなんじゃ。」

死神である事ばかりか自分の名前すら知らず、今は別の名を名乗
つておる」

その言葉に真つ先に反応したのは、ずっと暇そうに傍観者を決め
込んでいた十一番隊隊長更木剣八。

「なんだ。それじゃあ日番谷の勘違いかもしれねえじゃねえか。
本当に確かなのかよ？」

「ふむ……」

更木の言葉に、自慢の長い顎髭を何度も撫でる。

あの日番谷が、それも自分の幼なじみを間違える筈が無い。
浦原の証言もあるのなら、嘘を吐いているわけではないだろう。

だが記憶が無いとなると、此方も実際に確認しない事にはつき
りしない。

「仕方がないのう……。浮竹隊長」

「はい」

「かつての部下じゃ、お主なら本人かどうかの確認くらいは出来るじゃろう？」

やはり報告書だけでは伝わり難い部分もある。少し様子を見て来てはくれんかの」

「わかりました」

浮竹は以前、如月を隊に受け入れとても可愛がっていた。

日番谷の事もあれだけ心配していたのだ。

自分の目で確かめ、少しでも安心出来るなら丁度いいだろう。

「出発は明日の正午。」

少数であれば、供として数名連れて行っても構わぬ。くれぐれも無理はするでないぞ。

他の者は瀨霊廷にて待機。

この件に関してはまだ他言は無用である。よいな？」

こうして、隊首会はそのまま解散となった。

散り散りに隊舎へと戻って行く隊長達。
そんな中、一番隊舎を出てすぐ長い白髪を靡かせながら、浮竹は流れる雲を仰ぎ見た。

「明日か……」

「よかったじゃないの。日番谷君のこと、ずっと気になってたんでしょ？」

「京楽……」

浮竹の後ろから軽く声をかける京楽。

浮竹はそちらに振り返ると、ふっと笑みを溢した。

「ああ、またお菓子を沢山用意しないとな。
そうだ！ 京楽も一緒に行かないかい？ 元柳斎先生も、少数ならいいって言ってたし」

「僕で良いのかい？」

勿論だよ。久しぶりに氷華ちゃんにも会ってみたいしね」

「そうだな。……本当に」

今、彼女はどのように変わったのだろうか。

身長は伸びただろうか。

少しは人にも慣れただろうか。

もう、何かに怯えてはいないだろうか。

(如月……。お前の席は、いつでもとっておくからな)

もし彼女が此方に帰って来たら、まずは清音と仙太郎に紹介しよう。

それから今度は三人で仕事をするんだ。

二人は騒がしいから、如月も初めは困るだろうな。

だが、きっと楽しい毎日になる。

(明日から五日、まずは様子見か……)

記憶が無くて、どうやって生活しているのか。

他に、何か変わった事がなかったか。

二人は、本当に無事だろうか。

「本物、だといけどねえ」

「冬獅郎が見誤る筈ないさ。35年も一緒にいたんだから。俺達なんかよりずっと、彼女のことをわかってる筈だ」

「……そうだね」

「……さあ、そろそろ戻ろうか」

明日の正午、二人は現世へと向かう。

物語の役者は、少しずつ揃い始めていた。

オマケ

「おい」

「あ、お帰りなさいご主人」

「……ああ」

空座一高等学校、屋上裏。

影に隠れるようにして俯せに倒れた制服の少年と、それを前から見下ろす同じ外見を持った黒服の少年。

「……キング。……何をしている？」

「冬獅郎様が、屋上に隠れているよう言ったのだ。」

「こっついていれば、安全な確率は87%です。……なのだ！」

「（普通に屋上あがってろって意味だったんだがな……）」

「……わかった。お前の言い分はわかったからもうやめてくれ、制服が汚れる」

何もこんなに汚れの溜まりやすい場所を選ばなくても……

というか、こいつも一応は俺自身って事になるんだよな。
一般の奴には、今はこいつの方しか見えねえわけだし。
仮とはいえ同じ肉体を共有しているわけだし。

だがこいつが俺なら、周囲の認識上俺は……

「俺が、馬鹿ってことになるのか……？」

いや、んなわけねえ。

馬鹿なのはこの義魂丸の方だ。

俺は関係無い……等。

「……俺は馬鹿じゃねえ……」

「はっ。」

後から追いついて来た黒崎一護。

だがしかし、タイミングが悪すぎた。

「~~~~黒崎一護!~!」

「へっ? ちょ、おい冬獅郎!?

おま、落ち着けて……!!」

彼はこの数秒後、“日番谷の一人言を聞いたから”というなんとも理不尽な理由で、氷原行きとなる。

* * Story 11 ・今の君に必要な事* *

「よし……お前ら、今から如月の日記に自分の名前を書け。勿論フルネームでな」

「名前……ですか？」

昼休み、皆が弁当を食べ終わる頃。

離れた所で如月となにかをしていた日番谷が、此方に振り向きそう言った。

Story 11 ・今の君に必要な事

「今、ここにいる全員の似顔絵を描いてもらった。如月がいつでも確認出来るようにする為だ。」

黒崎から順に回せ」

「なんで俺からなんだよ。冬獅郎は？」

「俺はもう書いた。」

念のため振り仮名も忘れるなよ」

如月と共に弁当を広げる日番谷。

どつやら今から食べ始めるらしい。

(昼食も食べねえで何をしてるのかと思えば、そついつ事が)

日記を受け取り、ページを開く。

そこには、日番谷だと思われる顔の下に小さく書かれた“日番谷冬獅郎”の文字。

(うお……なんかすっげえ達筆)

十番隊隊長、日番谷冬獅郎。

見た目大分年下なのに、こういう所は大人っぽい。

日常生活の中で文字を書き慣れていているというか……そんな感じがする。

(俺の似顔絵は……これか)

沢山描かれた顔の中から、自分と思われる橙頭を見つげ出す。

どことなく漫画チックに描かれたそれ。

特徴もしつかりと捉えてあつて、色鉛筆によって柔らかく色付けされている。

そしてなにより、丸っこくて可愛い。

(時々絵柄変えてんのか。)

昨日見たのはなんつーか、ちょっと少年誌っぽかったし。

……つか可愛いな俺)

自分の筆箱からボールペンを取り出し、“黒崎一護”と書き記す。
冬獅郎程上手くは無理だが、まあこんなものだろう。

「ほらよ、乱菊さん」

「サンキューー護

あら、可愛く描けてるじゃない。

あたしはこれか……わかってるわね氷奈ちゃんVV」

全員が全体的にデフォルメされて可愛さアップな似顔絵に満足したらしい松本は、小さく鼻唄を歌いながら同じように名を記す。

その様子を見て、後ろから手元を覗き込む斑目。

「ああ？ 松本はこんな可愛くねえだろ」

「うっさいわねハゲ！

あんたの絵、頭に光足しといてやるわ」

「てめえ！！」

「お前らさっさと書けよ」

井上、石田、茶渡、阿散井、斑目、綾瀬川……と順々に手渡されるノート。

空いていた隙間が、彼らの手によって少しずつ埋められていく。

「凄いね日番谷君。」

「これならいつでも思い出せそう」

「ああ。困ったら日記で確認しろよ。」

「お前の日記に名前があったら、それはお前の友達だ」

「うん」

そんな彼らを視界に入れながら、黙々とおかずを食べ進める二人。

中身はどちらも至ってシンプル。

唯一玉子焼きだけは、どちらも共通のようだ。

(日番谷の方は大根おろし付き)

「如月」

「なに？」

「この甘納豆やる」

「え……いいの？」

「ああ」

「……ありがとう」

小さな袋に入ったそれを嬉しそうに受け取り、はにかんだ笑顔を浮かべる。

甘納豆は如月の好物だった。

ずっと日番谷と一緒にいたためか、食べ物好みまでそっくりなのである。

といつても、「冬獅郎が好きなのは私も好き」と本人が言っていただけで、実際はどこまで同じなのかわからないのだが。

尸魂界でもよく二人で分けていたのを覚えている。

記憶がなくなっても、そういった好き嫌いは変わらないのだろうか。

甘納豆を美味しそうに頬張る彼女を見ながら、そう考えを巡らせていた時だった。

「おい日番谷！」

「……？」

呼ばれた声にそちらを見ると、数人の男女が入り口に固まって手を招いていた。

どつやら用があるのは自分だけのようだ。

「日番谷君？」

「……悪い、ちょっと行つて来る。」

お前は先に食べてろ」

立ち上がった日番谷を不思議そうに見上げる如月。

そんな彼女に軽く謝罪を述べると、集団の方へと足を向ける。

靈術院時代のような呼び出しかとも一瞬思ったが、そこまで重い空気でもなさそうだ。

「……なんだよ？」

彼らの真正面。

身長差の問題から、見上げるようにして立つ。

目つきの悪さは自覚しているため、表情は出来る限り和らげて。

すると返つて来たのは、予想もしていなかった答え。

「凄エな日番谷、お前どんな魔法使ったんだよ！」

「まほう?。」

「如月さんだよ如月さん！」

魔法っていうのはあくまで物の例えだけだね。僕達の場合は返事を返してもくれなかったのに、日番谷君とは初めから仲がよかったじゃないか」

「……まあ……」

「だから、どうしたら如月さんが私達に心開いてくれるんだろうって」

「少しでもいいのよ？」

日番谷君なら、もしかしたら何か知ってるんじゃないかと思って……如月さんと友達になる方法」

「お前ら……」

純粹に驚いた。

まさか、あいつと進んで友達になろうとしてくれる奴がいるなんて。

「……しかし、あいつは記憶障害で……お前達のこと、覚えられない……」

「記憶喪失じゃなくて、覚えられないの？」

ならその時はまた教えてあげればいいじゃない！ ねえ？」

「そつそつ」

「……………」

そつか……。

ここは、霊術院とは違うんだ。

外見が人と違ってても。

特別な能力を持っていても。

きっかけさえ逃さなければ、友達は作れる。

友達が増えれば、あいつは喜ぶだろうか？

こいつらなら、最後まで裏切る事なく、あいつを支えてくれるだろうか。

信じることが、出来るだろうか。

(どうせ現世で過ごす事になるのなら……良い思い出、作ってやり
たいしな……)

向こうでは出来なかったこと。

こっちでは、出来ること。

沢山教えてやりたい。

幸せになってほしい。

「……俺が紹介する」

「え？」

「お前らのこと、如月に。」

俺から話せば、きっと受け入れてくれると思っぜ」

少しでも、あいつの力になれるなら。

「……行くぞ」

たといつか、俺から離れていったとしても。

それが、あいつの幸せに繋がる道なら。

あいつがそれを望むなら、それでいい。

俺はただ、あいつを護り続けるだけ。

支える役目は、なにも俺でなくても構わない。

(もし本当にそうなっちまったら……ちょっと悔しいかもしれねえけどな……)

小さく、苦笑いが溢れた。

「如月」

「お帰り、日番谷君」

綾瀬川から日記を受け取っている如月に声をかける。

すぐに顔を上げた彼女だったが、日番谷の後ろに控えた生徒達を見るなり眉を寄せた。

「……その人達は？」

キツと威嚇するように睨みつける。
昨日黒崎が言っていた話は本当だったらしい。

成る程、生徒が逃げるわけだ。

「ひっ、日番谷君……」

「……ああ」

ビクリと肩を震わせ一歩退いてしまった彼らの代わりに前に出た日番谷が、如月の頭をポンと撫でる。

「お前と、友達になりたいんだとよ」

「……友達？」

「ああ」

「……でも、私は……」

日番谷には反論出来ないのか、そのまま俯いてしまふ如月。
そんな彼女と視線を合わせるようにしゃがみ込み、彼は続ける。

「お前は、今は仲間を作った方がいい。

一人になる道ばかり選んでちゃ駄目だ。

折角こいつらが手を差し延べようとしてくれてるんだ。

その気遣いを無駄にすんな」

「……」

影のせいか紺碧に染まった瞳を微かに揺らがせ、ゆっくりと顔を上げる。

それに気づいた学生達は、姿勢を正しながらも笑顔を浮かべた。

「……受け入れてやれ。な？」

「……………うん」

頷いたのを確認し、立ち上がる。

後ろで学生達が嬉しそうに声を上げるのが聞こえた。

(とりあえず、きっかけは作れたか……………)

本当に信用を得られるかどうか。

後はこいつら次第という事になるだろう。

「まだ少し時間がある。」

「こいつらのことも日記に描いてやれ」

「うん」

一人一人スケッチを始めた彼女を見て、細く息を吐いた。

「日番谷」

「あ？」

「ありがとな、協力してくれて」

「……いや、構わねえよ。俺はただきつかけを作っただけだ。大したことやっちゃいねえ」

それを聞いた男子の一人　矢島とか言っただろうか　は、二ツと笑顔を浮かべた。

「いや充分だつて。」

「そっぴゃ俺、お前と話すのも初めてだよな」

「……そっぴゃそっぴゃだ」

「つーわけで、これをきつかけに俺らも今日から友達な！」

「はあ？」

「あつ、それなら僕も」

「私達もいいかな？」

「日番谷君とは、ずっとお話したいと思ってたのよねえ……」

近くで聞いていた他の奴らも同じようなことを口にし始める。
今度は此方が一步退く番だった。

「いや、俺は……」

「別にいいだろ？ 減るもんじゃないし。はい決定ー」

「てめっ、強制じゃねえか！

……ったく……勝手にしろ」

「おう！ よろしくな、日番谷」

(……あんま、目立たないようにしたかったんだがな……)

こうして何故か新しい友達も増えてしまい、先の苦勞が目に見えるように、今度は違う意味で深い溜め息を吐いた。

* * Story 12 . The second accident & quot .

最終目標は二人だけ。

だけど……

標的も二人だけとは、考えちゃいけないの。

Story 12 . The second accident ” 新
たな来客者”

授業が終わって放課後。

彼らは帰り支度を済ませると、すぐに教室から立ち去った。

向かうのは如月氷奈の仮住まい。

今度は朽木と黒崎も一緒に。

「そついや、来週からテストだつてな」

「チツ、めんどくせえ……あんなもんやんねえでも、順位つけてえなら直接勝負で決着つけちまえば早エだろうが」

「一般学生がんなこと出来ねえだろ」

「今回のテスト範囲。」

生物は確か蛙の解剖についてつて書いてあつたよね。まつたく美しくない。なんで僕が蛙なんか……」

「我が儘言つなつて」

空座一高の帰り道。

夕日を前に見据えながら、彼らは歩いていた。

「黒崎、お前勉強はしてるのか？」

「いや、全然。そつ言つ冬獅郎はどうなんだよ？」

「日番谷隊長だ。……さあな」

「隊長は勉強なんてしなくても大丈夫よ。ですよ、隊長？」

「天才、だからね」

「……………」

来週からのテスト。

対破面戦に向けた対処に追われ、すっかり忘れていた。

月曜日には一日目が始まる。

暫くの間は、また黒崎の家で延々進まぬ勉強会……なんて事になるのだろう。

(進まない原因は言わずもがな松本達だ)

「テストなんてもの、本来俺達には関係無いんだけどな」

「隊長が真面目だからいけないですよ」

「そっつスよ。高校通ってるからって、なにもそこまでしなくても……………」

「補習とかってなると何かとめんどくせえからだ。確かてめえら前

「回貽んど赤点だったよな？ 次3教科以上赤点取ったら強制帰還だからな」

「「「え”っ…………!?”」」」

「そびえ立つ家々の横を一つ、また一つと通過していく。

「ゆっくり、ゆっくり、流れゆく景色。」

「…………ねえたいちよ」

「前も言ったと思うが、現世の勉強まで面倒見ねえからな」

「…………はい」

「あの…………如月殿は受けられるのですか？ テスト…………」

「…………私は…………大丈夫。覚えてるから」

「は？」

「その時、一羽の地獄蝶が目前を舞った。

「ああ、いたいた。おーい日番谷君！」

「日番谷隊長！」

声の響いてきた先。

一軒家の屋根の上。

見上げてみると、そこには穿界門を開いて来たらしい浮竹と京楽の姿。

「浮竹さん、京楽さん!？」

「……誰……?」

静かに地面に着地した二人。

浮竹は真っ直ぐに日番谷の方に近づいて来ると、その薄い肩をガシツと掴んだ。

「お前ら、なんでここに……」

「冬獅郎、怪我はないかい？ ちゃんと食事は取ってるかい？ それから」

「浮竹。………京楽」

「やれやれ」

浮竹の手を軽く払うと、視線だけでその隣にいる京楽に答えを求めめる。

その視線に気づいた京楽は軽く笠を被り直すと、目線は日番谷に向けながらも如月の方に歩み寄った。

「総隊長に言われてね、ちょっと様子を見て来いって。確認の意味も兼ねてさ。」

久しぶりだねえ……ちょっと大きくなったんじゃないかい？」

「……………知ってる人……………？」

自分を知っているらしい口振りに戸惑う如月。
日番谷の様子から敵ではないと判断したのか、警戒はいくらか緩めている。

「うん、間違いないね。」

「そうだよね浮竹」

「ああ。……………だが、本当に覚えていないんだな」

「浮竹隊長……………」

寂しそうな表情を浮かべる浮竹。
そんな浮竹の様子をじっと見ていた日番谷だったが、ふと夕日に視線を移した。

「……………あの？」

「浮竹、京楽……………今から如月を家まで送る。暫くは此方に滞在するつもりなんだろ？ 一緒に来い」

総隊長の命で来たのなら、なにかと話もある筈。

井上には松本に連絡してもらって、如月を送り次第こいつ等連れて帰ればいい。

通信機を設置したあの部屋なら、それくらいのスペースは……………

「そうだ！ 二人とも、お菓子を持って来たんだ！」

「いらんっ！…！」

「……………ほしい……………」

「……………」

歩き出した銀髪三人の姿を見て、相変わらずだなと思う。
だが、その相変わらずがあるからこそ、今が幸せなんだ。
この下らないやり取りこそ、何よりも大切な時間なんだ。
だから今という時を、精一杯楽しく過ごすんだ。

「惜しかったね、姉さん」

「そうね。もう少しだったのになあ……」

「あの女、邪魔だね」

「足止めしちやいましょうか」

木霊するのは、不気味な二つの笑い声。

「研究は、順調なの？」

「じきに完成するよ」

「……そう」

瞳に宿した、深い闇。

そこに映るのは、銀色の輝き。

「さあて……次は誰を狙おうかしら？」

開幕の準備は、整い始めた。

もう誰にも止められない。

今は過去に、未来に捕われず、
現在いまを生きよう。

こうして皆で笑い合えるのも、もう……最後かもしれないから。

「おはよう日番谷君、如月さん！」

「おはよー！」

「……………ああ……………」

「……………おは、よう……………」

翌朝。

いつも通り登校した俺達を迎えたのは

黒崎達でも井上達でもなく。

「日番谷君っていつも早いよね」

「朝何時に起きてるの?」

「……………えっと……………」

今まで何も接点の無かった、学生達だった。

S t o r y 1 3 . F a - q u a l c h e c o s a

それは、教室に入ってすぐのこと。

飛び交う挨拶。

向けられる笑顔。

思わずクラス番号を確認する。

(間違いねえ……よな)

……なんだこの空気。

俺が何かしただろうか。

しかしまったく覚えが無い。

「日番谷！」

「？」

笑顔で走り寄って来た青年。

昨日如月と友達になった奴らの一人だった。

「矢島」

「ビックリしたろ。」

こいつら、昨日俺達の会話聞いてたらしくてさ。仲間に入りたいんだとよ」

「は？」

「だから、友達」

「……………」

どうやら後々記憶置換が必要な人間が増えてしまったらしい。接点のあった人間の記憶は元々書き換えるつもりだったが…………どうしたものが。

目立たないようにしていた筈だったんだがな…………。

「日番谷君、勉強出来るんでしょ？」

聞いたよこの間の英語。凄くペラペラなんだもん、びっくりしたよー。

先生はイギリス英語に近いーみたいなこと言ってたけど、同じ英語でもアメリカとは違うのかな？」

「いや……………」

「つかさ、お前ロシア人と日本人のクォーターだって噂あるけど、それ本当？」

「は？」

「英語ペラペラなのいいなあ……私わかないんだ。だから教えてほしいなあーなんて」

「俺も世界史苦手だ。よかったら教えてくれよ」

「俺は数学！」

「ちよつ、おい待てつて！」

一斉に群がってくる生徒達。

その中に囲まれた俺は、あつという間に身動きが取れなくなる。

思わず溢れる、身体中の二酸化炭素を全て絞り出すかのようなそれはそれは深い溜め息。

今週に入って何回目になるのか。

ここ最近の不幸続きも、実はこのせいなんじゃないだろうか。

“溜め息吐くと幸せが逃げる”と言うし。

だとするとこの先俺の人生は、どんどん幸せから遠ざかっていくんじゃないだろうか。

(主に松本達のせいか……)

あの馬鹿共のせいで、俺の苦勞が絶えないんだ。

それに新たにこのクラスの奴ら全員が追加されると。

総勢約40名。

） ……どんまい俺）

というか誰か本気でこの位置替わってくれ。

心の中で呟き、 もう一度盛大に溜め息を吐いた。

「如月さん！」

「？」

参考書を抱えた人の群れからどうにか這い出している途中、矢鳥の上擦った声が耳に届く。

どうも様子がおかしい。

何事かわからず顔を上げた日番谷は、直後“きよとん”と効果音の付きそつな間抜け面を、彼らの前で晒すことになる。

「 ……なに？」

「あ、あのさ……後で、一緒に弁当食わねえ？」

矢島が声を掛けた相手。

それは突然の騒ぎに対応出来ず、入り口で一人呆然と立ち尽くしたままの如月だった。

いや、それは彼女の名前が出た時点でわかっているのだが、問題はそこではなくどこか必死な矢島の様子。

「……日番谷君と」

「あっ、じゃあ皆で！ 皆一緒にいいからさー！」

「……………それなら……………いい、と思う。多分……………」

「ほんとか！？ いやっしやー！」

「……………」

『あの……よかつたら僕と、お昼一緒に食べませんか!?!』

『お昼? ……いいですよ』

『ほんと!?! やったあ!?!』

霊術院や瀨霊廷でも何度か聞いた覚えのあるやり取り。

ほんの少しの違和感。

頭の片隅で思い出す。

『なにがあんなに嬉しいんだ? 弁当一緒に食っただけだろ』

『ハハッ、やっぱり冬獅郎は鈍いな』

『なんでだよ……』

『あれは……』

あれ、もしかしてそういうことか？

あんまよくわかんねえけど、確か昔草冠がそんな話をしていた気がする。

一応聞いてはいたものの色事には大して興味も持てず、結局は記憶の奥底にあっさり流してしまっていた。

第一自分達には無縁の話だと思っていたから。

もみくちやにされて皺になった服を軽く払いながら、俺は矢島に近づいた。

「不躰な事を聞くがいいか？」

「ん？ なんだよ日番谷」

「お前……如月のことが好きなのか？」

「……………」

不自然な間。

数秒の沈黙。

如月が首を傾げると同時、彼はふっと口元を吊り上げ、思い切り拳を掲げた。

「イエス イズ ライト！」

「Yes That Lightな」

「初めて見た瞬間から、この胸に電気が走ったんだ！ ビリビリッと」

「感電したのか？」

「違っつつの！ つまり、一目惚れしたんだよ一目惚れ」

「……………」

「その瞬間から、俺の心は如月に向かって一方通行！！」

「随分報われねえな」

「いやいやいやいや、それほどでも」

「とりあえず日本語の使い方おかしいぞお前。それと如月が怯えてる」

会話が全く噛み合っていない気がするの俺の気のせいだろうか。いや、絶対に気のせいなんかじゃない。

コイツこんなに馬鹿だったのか。

松本や斑目、阿散井をも凌ぐ馬鹿だ。

英語はともかく母国語が出来ないって……。

(……なんでこんな奴を友達として受け入れちゃったんだらうな……)

まあ賑やかで飽きなさそうな奴ではあるが。

「で……結局好きなのか？」

「まあ、そついう事になるな」

「……………そうか」

(だがなんとなく、腑に落ちないのは何故だろうか……)

恋愛感情は無い。

それは断言出来る。

それならどうしてだ。

仲間だから？

家族だから？

幼なじみだから？

「……………」

一人で喋り続ける矢島を他所に、俯き気味に考え込む。
それをどう勘違いしたのか、矢島は喋るのを止めるとニヤニヤ笑
い始めた。

「……………なんだ？」

「わかったぞ日番谷……………」。

「お前も如月が好きなんだろう！！」

「違う！！」

「はっはー、照れんな照れんな。俺とお前は今日から恋のライバルだ

やっべえ俺勝てるかな……………」

「……………ハァ……………」

「疲れる。」

「本当に疲れる。」

「この込み上げる怒りやら呆れやら色々混ざりあった複雑な何かを抑えるのが。」

「早くこの状況をなんとかしてほしい。」

「誰でもいいから。」

「大丈夫？……………えっと……………ひ……………日番谷君」

「……ああ……大丈夫だ」

日記を出して名前を確認する如月。
鉛筆を取り出し、矢島の名前と顔を照らし合わせながら、似顔絵の下にこっそり“危険”と記す。

……賢明な判断だ。

「うおっ！ なんだこの雰囲気！」

「黒崎っ！」

「えっ……な、なんだ？」

ようやく登校して来た黒崎。

珍しく井上達も一緒だ。

途中で会ったのだろうか。

「あの、日番谷殿。」

これは一体……何かあったのですか？」

「あー……いや、なんでもねえ。」

今日は早いんだな、黒崎」

「親父に起こされたんだよ」

「冬獅郎くん、乱菊さんが怒ってたよ？ 『またおいて行ったー！』
って」

「ああ……忘れてたな」

「浮竹さんと京楽さんは？」

「外で藤堂と一緒にいる」

流石に中には入れられないため、外で待たせることにした。

今頃京楽が藤堂にベツタリだろう。

そう思いながら、軽く外を見る。

……あ、落とされた。

「今日は俺も一緒に食うからな」

「……………悪イ、お前誰だっけ」

「矢島聡太だよ！ クラスメイトの名前くらい覚えとけよな黒崎……えーと……………いちご？」

「てめえわざとだろそれ」

(……………しかたねえ)

鞆からノートを取り出し、1ページちぎり取る。
そこに筆ペンで手紙を書く。と紙飛行機を折り、下に落ちた京楽に
向けて窓から飛ばした。

「これからお互い頑張ろうな、シロちゃん」

「シロ言っな」

「いやー、だって前から思ってたけどお前小さ」

「ようしわかった、そこに直れ矢島。二度とその軽口叩けないよう

に俺がきつちり指導してやる」

「……あの……怖い、怖いっス日番谷サン」

「……自業自得」

「えっ、ちよっ如月まで……!!」

「矢島頑張れー」

「ええーっ!?!」

賑やかな仲間。

賑やかなクラス。

それは外にいる浮竹達にもはつきりと聞こえていて。

「いやあ、皆ちゃんと現世に馴染めてるみたいでよかったよ」

「京楽隊長。手紙にはなんて?」

「お前達の分の弁当は机の横にかけておくから、昼休みになったら勝手に持って行け。窓の鍵は開けておく”

……だってさ」

「俺達も一緒に食べたかったんだけどな……」

「仕方ありません。現世のお友達がご一緒なのですから」

「そだね」

ガラス越しに見える二人の姿に表情を緩める。

新しく出来た人間の友達。

これがはたして、吉と出るか凶と出るか。

今はただ、二人の幸せを願って。

オマケ

スパーンツ!!

「たいちよーっ！ ご無事ですかあっ!？」

「んなっ!？」

ゴンッ……

「「「……うわぁ……「「「

飛び込んで来た松本。

勢い余って弾き飛ばされる日番谷。

何かがぶつかる鈍い音。

頭を抑えて踞る……彼。

(痛そう……)

一体何が起きたのか？

それはご想像にお任せしようと思っ。

絶対分かりやすいから。

「あ……アハハハハ、ハ……」

「つゝつ松本オオツ!!」

「キヤー! ごめんなさいッ!」

「今日も元気だねえ、十番隊は」

「元気なのは良いことだからな!」

(……いいんでしょうか……これは……)

今日も空座一高は、平和である。

「悪いな……わざわざ呼んだりして」

「うっん………何するの？」

「少し、話したい人がいるんだ」

学校も終わった放課後。

日番谷は如月を連れて、井上家にあるモニター前に来ていた。

「ほんとにいいのかい？ 会わせちゃって」

「テムエらが言いだしたんだろうが……」。

どうせ覚えちゃいねえんだ、報告だけならなんとかなるだろ」

「だといいけどねえ………」

モニターの電源を入れる。

そこに映し出されたのは、久方ぶりに見る一番隊舎の様子だった。

Story 14 . signal

「総隊長、如月を連れて来ました」

「うむ……すまんの日番谷、急な話で驚いたじゃろ」

「いえ……」

モニター越しに対峙する隊長達。

場の雰囲気は圧されてか、単純に警戒の表れか。

如月は日番谷の隣で、しきりに視線を泳がせていた。

「十四郎……その者で、間違いはないかの？」

「はい。ですが……やはり彼女は記憶を失っているらしく……我々

の事もさっぱり」

「霊庄も無いしねえ……全部日番谷君の報告通りだよ」

「ふむ……そうか……」

「れいあつ……」

小さく言葉を繰り返す如月。

そんな彼女の様子を、日番谷は黙って見つめていた。

今朝からなにか様子がおかしい。

初めて会った時から、少しずつ何かが変わり始めている気がする。

蕾が人知れず花開くように、静かでゆっくりとした速度で。

けれどそれほど美しいものではなく、むしろ花弁が一枚開くたび、ひび割れた薄氷の上に足を踏み出しているかのような……不安定で不穏な雰囲気を孕んだカウントダウンのような。

そんななんとも言えない不自然さを、彼は確かに感じていた。

考えすぎとはわかっていても、どうしても落ち着かない。

その違和感の正体も……今はまだ、はっきり捉える事は出来そうにないのだが。

「霊圧が無いとなると、此方に連れ帰る事も出来んのか……」

「今暫く、様子を見ますか？」

「現状では、それしか手は無いじゃろうな。此方に帰還し次第、改めて報告書を提出してもらおうぞ」

「はい」

「山じい、風音ちゃんにも協力してもらっていいかい？」

「風音……藤堂か……久しい名じゃ。やはり、浦原の所におったのかの？」

「今は、如月の護衛を務めている様です」

「ふむ……それならよいじゃろう。」

「長期に渡り行動を共にしていたのなら、藤堂の証言も貴重な情報になる」

「有難うございます」

暫くは様子見。

だが、まだわからない。

浮竹達の報告によっては、尸魂界が如月を見放すという可能性もある。

つまりは追放処分だ。

そうならば、たとえ彼女の身に何があったとしても……助けは期待出来ないだろう。

「……我々からの報告は以上です」

「ご苦労。……そうじゃ日番谷」

「はい」

「雛森副隊長が、如月との面会を申し出ておるが……どうする」

「雛森が……？」

「もう、平気なんスか？」

雛森桃。

前にも一度このモニター越しに話をしたが……その時は彼女の混乱により中断せざるを得なくなった。

あれから一度も会っていなかったが……もう、大丈夫なのだろうか。

「まだ精神的には完治しておらぬ。じゃからこうして確認してあるのじゃよ。」

「主ら二人が決めなさい」

「……………」

今の状態で二人を合わせていいものか……

記憶に残らないのなら問題無いような気もするが、なにせ僅かな接触が如月にどんな影響を与えるかわからない。

「……………如月……………お前はどうしたい？」

「……………雛森って？」

「……………俺の幼なじみだ。お前の事も知ってる」

「知り合い……………なら、会いたい……………」

「……………そうか……………総隊長」

「安心せい。ちゃんと見張っておる」

「……………お願いします」

もう、あの日の二の舞にならないように。

雛森も、如月も……悲しませたくないから。

「……じゃあ、僕達は先にリビングに行ってるよ。皆一緒じゃ話し
難いでしょ」

「そうだな。向こうで待ってるよ」

「わかった……礼を言う」

退室する浮竹と京楽。

それと入れ替わるように、小さな足音が聞こえて来た。

モニターに映る雛森の姿。

まだ少しやつれているが……成る程確かに、この前よりは大丈夫
そうだ。

「氷華ちゃん……よかった、無事だったんだね……」

如月の無事な姿に安堵したのか、目を細める雛森。

如月はそんな彼女をただ黙って見つめたまま。

「懐かしいなあ……なんにも変わってないや」

「……………雛森、さん？」

「え……………どうしたの？ 氷華ちゃん。いつもはそんな風に」

「雛森。悪いが、コイツは記憶が……………」

「……………覚えてないの？」

「ああ……………それから、如月氷奈だ。……………氷華じゃねえ……………」

「……………そつ、か。乱菊さんに少し聞いたんだけど……………覚えてないんだ……………」

どうやら、話の発端は松本らしい。

記憶喪失の件までは聞いていなかったのか。

大方、話し忘れてただけだろうが。

「残念だなあ、沢山話したいことあったんだけど。

じゃああたしの事もわからないよね。雛森桃……………氷奈ちゃんの幼なじみだったのよ？」

「幼なじみ……………雛森……………桃……………」

「そう。やっぱり……………覚えてない？」

「……………桃……………」

問いかけには答えない。

相変わらず、言葉を繰り返すだけ。

そんな彼女の様子に、日番谷と雛森は顔を見合わせた。

「氷奈ちゃん？ どうしたの？」

「……………」

反応は無い。

「……………どうしたのかな、氷奈ちゃん……………」

「……………さあな。時々なるんだ」

「そうなんだ……………」

「……………悪いな雛森、こんな形でしか会わせてやれなくて……………」

「ううん、いいの。ちゃんと無事だったわかっただけで……………」

「そうか……」

「それにしても、氷奈ちゃん背伸びたね。日番谷くんと殆んど変わらないや」

「ウルセエな！」

「もー、冗談だよー」

「死神……霊圧……桃……冬獅郎……」

「え？」

二人が話している最中、割り込むように聞こえた声に振り返る。

そこには俯いた如月の姿。

しきりに何かを呟いていた。

「如月？ ……どうした？」

「浮竹……京楽……私、知ってる……」

「知ってる？ お前、まさか記憶が……」

『よかった、生きてた……待ってて、今おばあちゃん呼んで来るから!』

『あたしは、雛森桃。桃って呼んでね』

『二人とも、今日からあたしの家族だからね!』

浮かんでくる記憶。

昔の……大切な思い出。

「桃……知ってる……私……っ!」

「如月っ!」

頭を押さえて踞る如月。

慌てて駆け寄りその小さな体を支える。

「いや……いやだ……いや……っ！」

「おい、落ち着け如月！」

「嫌だ！ なん、で……なんで……嫌あつ……！」

「如月……！」

此方の言葉も耳に入らないのか、ひたすら嫌だと叫び続ける如月。しかし、その口がピタリと動きを止めたかと思うと、俯いていた顔をゆつくりと上げた。

痛みからか頬を伝う涙。

その目は真つ直ぐ日番谷を捉えていて。

「嫌だ……なんで……忘れたくないよ……冬獅郎………」

「……氷華………」

「っ……うああアアアッ……！」

「氷華っ！！」

悪イ雛森、また後日連絡する！」

「あっ、シロちゃん！」

ブツン……

途切れた通信。

視界に残ったのは、暗くなったモニターだけ。

「氷華ちゃん……大丈夫かな……」

「……………」

一番隊舎には、虚しい静けさだけが残った。

「危ない危ない。もう大分効き目弱くなってるわね……………」

「あれはまだ試作品だったからね」

「仕方ないか……………いいわ、もうじき新しい子が手に入るんだし。

如月氷華……………まだ殺すには早いわね。もっともっと苦しんでもらわなきゃ……………次はどうしてやろうかしら？

ちゃんと見張っておいてね」

「ああ、わかってるよ……………姉さん……………」

消えていく記憶。

全てが、闇の底へと沈んでいく。

「復讐は、必ず果たすからね。待っててね……お兄ちゃん……」

彼女達は、まだ知らない。

この復讐劇の、本当の真実を……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8499n/>

memories in the Glace

2011年1月27日22時16分発行